タイムスケジュールと目次

13:00～13:05　あいさつ

13:05～13:30　報告1「史跡小牧山(小牧山城)の調査と整備」
小野友記子（小牧市教育委員会）…… 1～4

13:30～13:55　報告2「史跡本證寺境内ー近年の発掘調査成果ー」
後藤麻里絵（安城市教育委員会）…… 5～8

13:55～14:05　休　憩

14:05～15:05　講 演「戦国期城郭から織豊期城郭へー東海・九州の事例を中心にー」
岡寺　良（九州国立博物館）…… 9～16

15:05～15:20　休　憩

15:20～15:45　報告3「岡崎城跡の発掘調査と史跡整備」
山口遥介（岡崎市教育委員会）……17～20

15:45～16:10　報告4「吉田城址の近年の発掘調査と整備」
中川　永（豊橋市教育委員会）……21～24

16:10～16:35　報告5「名古屋城における天守台石垣の築造工事について」
西本茉由（名古屋城調査研究センター）……25～28

16:35～16:50　コメント　鈴木正貴（愛知県埋蔵文化財センター）

16:50　閉会

参考資料　あいちの城館遺跡　……表紙裏・29～39・裏表紙裏

◆愛知県史跡整備市町村協議会の紹介◆

愛知県史跡整備市町村協議会は、史跡等の整備に関する調査研究及びその具体的方策の推進を図るとともに、情報連絡活動を行い、もって文化財の保存と活用に資することを目的とし、平成3年に県内市町村自治体が加盟することによって発足しました。

加盟団体一覧

尾張地区（22団体）

名古屋市、一宮市、瀬戸市、半田市、春日井市、津島市、犬山市、常滑市、江南市、小牧市、稲沢市、東海市、知多市、豊明市、愛西市、長久手市、東郷町、阿久比町、東浦町、南知多町、美浜町、武豊町

三河地区（15団体）

豊橋市、岡崎市、豊川市、豊田市、安城市、西尾市、蒲郡市、新城市、知立市、田原市、幸田町、みよし市、設楽町、東栄町、豊根村

報告1

史跡小牧山（小牧山城）の調査と整備

小牧市教育委員会　小野　友記子

１　はじめに

国指定史跡小牧山（小牧山城）では平成 10 年以降の地道な発掘調査等の整備事業が続く中、活用、特に観光的側面からのニーズが近年劇的に高まってきている。本報告では小牧山をめぐる発掘調査と史跡整備、そして地域ブランドへの展開に至る経緯についての概要を紹介したい。

２　史跡小牧山の概要と歴史

史跡小牧山（小牧山城）は小牧市に所在する戦国時代の城郭跡で、名古屋市の北方約 15㎞に位置する標高 85.9m、面積約 21ha の小山である。

濃尾平野に独立してそびえるその姿は、尾張地方のランドマーク、小牧市のシンボルとして親しまれている。（写真１、図１）

小牧山城は永禄６～10 年（1563～67）、織田信長が清須城（愛知県清須市）から岐阜城（岐阜県岐阜市）に移るまでの４年間居城とし、天正 12 年（1584）には織田信雄・徳川家康連合軍と羽柴（豊臣）秀吉軍が対峙し、もう一つの天下分け目とも評される小牧・長久手の戦いで、家康軍が小牧山城を陣城（本拠地）としたことなどで戦国史に名を馳せる城跡である。

小牧・長久手の戦い後には廃城となるが、家康ゆかりの古城であることから、江戸時代を通して尾張藩領として直接管理のもと保護された。昭和２年（1927）、山のほぼ全域が県下４番目の国史跡として指定され、昭和５年（1930）には尾張徳川家から小牧町（当時）に寄贈を受け、以降、現在まで市民の憩いの山として大いに親しまれている。

小牧山城は、わずか４年という極めて限定的な城の存続期間に加え、江戸時代以降、尾張徳川家・小牧町（当時）等が古城として大切に保護したという経緯から、山中の遺構の残存状況は良好で、研究上貴重な城郭である。

３　史跡小牧山の発掘調査と史跡整備

●発掘調査

小牧山城の縄張は基本的に永禄６年の信長築城時のもので、小牧・長久手の戦いで家康方の陣城となった際、山麓をめぐる堀と土塁、中腹の堀と土塁、虎口などが改修された。

小牧山城の発掘調査は、史跡整備に伴う事前調査として実施している。昭和～平成初頭の北麓の屋敷跡伝承地や東麓の帯曲輪地区などの調査を経て、現在は山頂（主郭）を中心とした主郭地区の調査を進めている。

主郭をめぐる斜面では２～３段の石垣を検出した。（写真２）石垣は野面積で鈍角の入隅・出隅を繰り返し主郭を囲む。平成 26 年には３段目の石垣を確認し、主郭が幾重もの段築石垣で囲まれていたことや、石垣の構築が予想以上の範囲に及ぶことが明らかとなりつつある。

小牧山城では、主郭を含む周辺がどのように利用されたか文献等の記録もなく判然としていなかったが、平成 30 年度の第 11 次発掘調査では、１棟の礎石建物の一部を確認し、（写真３）令和２年度の第 13 次発掘調査では、主郭東側の曲輪に庭と推定される玉石敷や立石が見つかった。（写真４）のちの信長の居城である岐阜城と安土城では山頂一帯に信

長のための特別な生活空間が存在していた記録があり、小牧山城で確認された建物跡や庭と推定される空間は、のちの岐阜城、安土城のそれらに相当する施設の一部である可能性がある。

主郭地区の調査成果は、信長の築いた小牧山城が「美濃攻略のための一時的な砦・城」であるという従来の評価を塗り替え、織豊系城郭の初現となる本格的な構えであったこと、いわゆる日本の「城」の石垣の源流がここに求められることを示している。信長の城づくりにおける石垣への志向が、安土城築城からではなく小牧山城で既に具現化していることが明らかとなり、織豊系城郭石垣の出現を小牧山城からとする検討が必要となった。

石垣上の建物について、推定する手がかりはほとんどないが、これまで瓦が出土していないことから、建物があったとしても、瓦葺ではなかったと思われる。後の信長の居城である岐阜城・安土城が瓦葺建物や天主を備えている点と比較して、中世城郭から織豊系城郭への過渡的様相を示したものといえよう。

永禄６年時点で尾張の一国守レベルであった信長が、「城に石垣を採用する」という事業をどこから着想しどのような技術掌握により実現させたのか、今後も続けられる調査によって明らかになることが期待される。

●史跡整備

近年、小牧山の東麓と南麓では、市立中学校等山中に設置されていた公共施設の移転後に発掘調査を行い、その成果に基づく城跡の復元・整備が進んでいる。平成 10 年度に『史跡小牧山整備計画基本構想』を、平成 31 年度に『史跡小牧山保存活用計画』を策定し、史跡全体の整備ビジョンと着手の優先順位を定め、その方針、手順に従い、史跡内の各地区の発掘調査や整備基本計画の策定、整備工事を進めている。小牧山の山中では、毎年、いずれかの場所で調査や整備が行われ、新しい発掘調査成果や整備でその成果の反映、還元に取り組んでいる。来訪者にとっては、来るたびに姿を変える、「生きた史跡」ともいうべき活気を生み出している点も小牧山の特徴といえよう。

東麓の帯曲輪地区では、永禄期の信長在城段階に山を取り囲むように配置された武家屋敷群の区画跡や、天正期に家康が陣城とした際に改修した土塁や虎口などを解説とともに整備した。（写真５）南麓の大手曲輪地区では、天正期の土塁と堀を復元・整備した。（写真６）

また、史跡のガイダンス施設として平成 31 年４月に「小牧山城史跡情報館（れきしるこまき）」がオープンした。（写真７）小牧山の南東麓に建つこの施設では、小牧山の歴史や文化、残された貴重な自然を伝えることを目的とし、映像や模型を用いた常設展示や企画展示、ワークショップなどを通して小牧山に関する最新の情報を提供している。

４　地域ブランド「小牧山」へ

史跡小牧山は、これまで徳川家康の「小牧・長久手の戦い」の陣跡として知られ、織田信長が新たに築いた居城という側面は地元でもほとんど認知されていなかった。信長時代の小牧山城は美濃攻略の簡単な出城程度と考えられていたが、上記のとおり、主郭地区の調査で確認された石垣はその評価を覆す成果であった。城郭石垣のルーツとして年々関心が高まり、メディアでも大きく取り上げられたことをきっかけに、小牧山での調査や整備に対する、市民の理解、受け止め方は大きく変わりつつある。（写真８）

史跡小牧山の地域ブランド化への端緒となる動きは平成 25 年に行われた織田信長小牧山城築城 450 年記念事業である。同事業と連動して実施した史跡シンポジウム（写真９）

には 1300 人が参加し、コーディネーターの「史跡整備は時間をかけて行うもの、慎重な整備を」という総括では自然発生的に会場から拍手が起こるなど、市民は史跡整備に関する様々な制約を理解した上で応援してくれていると感じた。

記念事業と並行して小牧山を市のブランドと位置づける作業も進められた。モニター調査等からブランドコンセプトを定め、「子育て」と「小牧山」の２本柱の地域ブランドが策定された。史跡小牧山は地域資産として観光の核、市民の誇り・愛着の醸成のシンボルとして機能することが求められている。

こうした取り組みを通して得られた効果としては、多くの人に信長の石垣の存在を周知するなど史跡の価値の啓発に大きく寄与できたこと、史跡整備への理解の深化などが挙げられる。特に市民が郷土の文化財・歴史に誇りを持つきっかけ作りができたという手ごたえがあった。 その一方で、「活用」する側の事業や担当者、来訪者からは、発掘で見つかった石垣等の遺構は埋め戻さず、いつでも見られるようにしてほしい、という要望が出され、遺構を「後世に正しく守り伝える」という史跡保護の概念とのギャップが生じてしまうという課題も感じている。地域に活かされる史跡であるために、史跡を「守り」、「活かす」それぞれの立場での十分な協調、コンセンサスの構築が重要である。

写真１　史跡小牧山航空写真

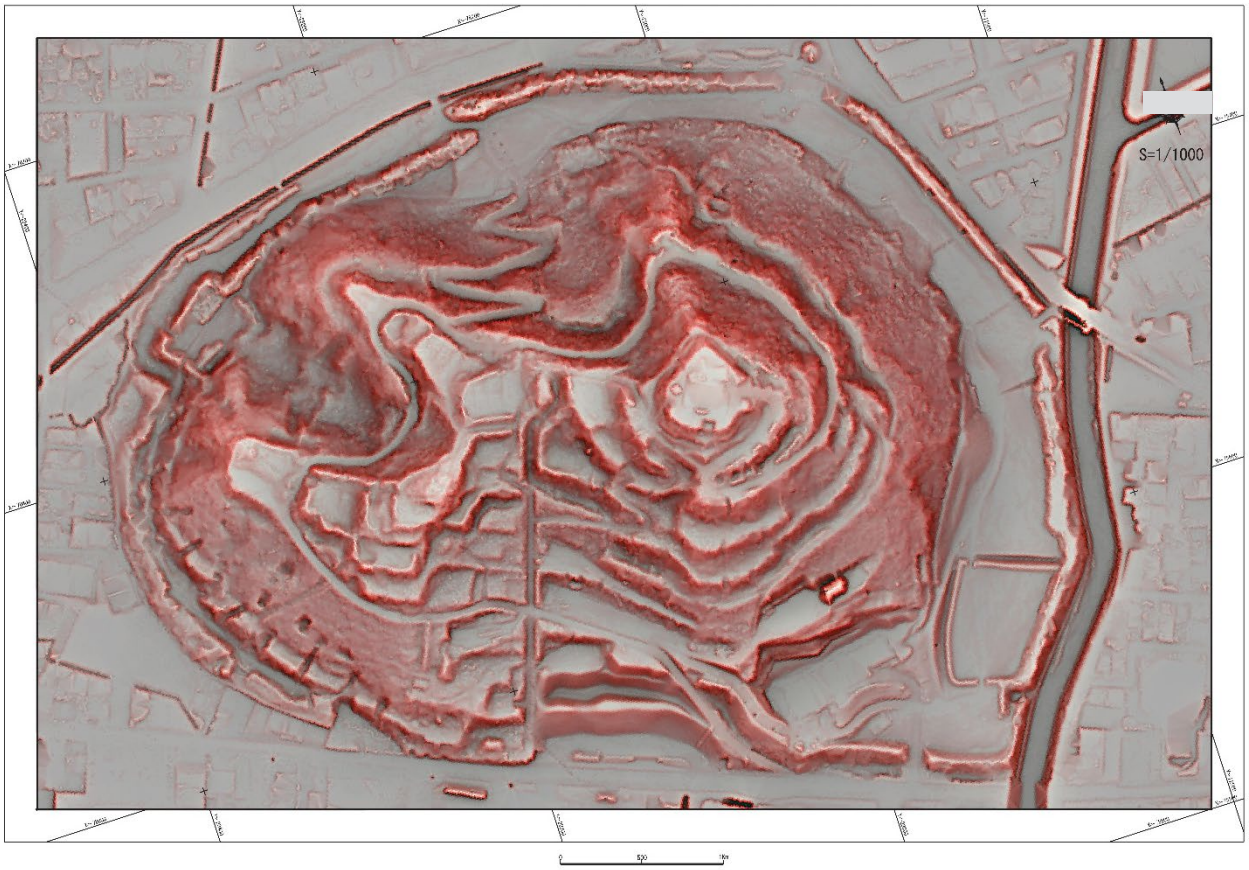


図１　史跡小牧山　赤色立体図

写真２　主郭で見つかった２段の石垣（第３次発掘調査）

写真３　礎石建物跡（第 11 次発掘調査）

写真４　玉石敷遺構（第 13 次発掘調査）

写真５　東麓帯曲輪地区の整備状況

写真６　南麓大手曲輪地区の整備状況

写真７　小牧山城史跡情報館（れきしるこまき）

写真８　発掘調査現地説明会の開催状況（第７次発掘調査）

写真９　史跡シンポジウムの開催状況

報告2

史跡本證寺境内－近年の発掘調査成果－

安城市教育委員会　後藤　麻里絵

1　はじめに

平成 27 年（2015）に国史跡に指定された本證寺境内は、戦国期～江戸時代に築かれた二重の堀と土塁の一部が残る史跡である。三河一向一揆に関わる寺院境内地として重要であるとともに、浄土真宗寺院の伽藍のあり方や仏教信仰のあり方を知るうえでも重要である。現在私たちが目にすることのできる主要な建物群と堀からなる景観は、江戸時代の伽藍絵図（図 1・1'）に描かれた境内の姿を今なお留めている。

2　本證寺の歴史と本證寺境内の概要

本證寺は、鎌倉時代後期の創建とされ、室町時代には、上宮寺・勝鬘寺（ともに岡崎市）とともに三河三か寺と呼ばれる本願寺派の代表寺院となっていた。永禄 6 年（1563）、家康の家臣が本證寺領の不入権を侵したことが発端となり、三河一向一揆が起こった。家康の家臣であり、本願寺門徒であった家康の家臣たちの中には、その配下から離脱して一揆方に加勢する者もいた。本證寺は、一揆方の中心であったが攻撃を受けたという記録は確認されていない。最終的に一揆は家康に鎮圧され、家康領国から追放される結果となった。天正 13 年（1585）、帰住を許された本證寺は、江戸時代に入ると本山・領主と末寺を仲介する中本山・触頭として再興を果たし、幕末には 200 余寺の末寺を抱える大寺院となった。

本證寺境内は、碧海台地と呼ばれる洪積台地上に位置する。近辺の台地東端には、東 0.8 ㎞に加藤嘉明の父が居城したと伝わる岩根城、南東 0.9 ㎞に藤井松平氏の藤井城、北 1.2 ㎞に本多正信の館跡と推定されている小川的場丘城など小規模な城館がいくつか存在した。

史跡地内には、寛文 3 年（1663）に再建された本堂など江戸時代に建立された堂宇と、それらが建ち並ぶ境内を巡る内堀、寺領のうち「寺内」と呼ばれた東西約 320 m、南北約 310 m の範囲を巡る外堀、そして境内の北側に土塁が残存する（図 2・写真 1）。境内周囲の標高はおよそ 12 ～ 14 mであるが、外堀の北西で 15 mを測る。一方、内堀で囲まれた本堂周辺は 11 m程度と低くなっており、現在でも本堂周りの内堀は水堀となっている。

3　発掘調査の成果

平成 11 年（1999）以降、断続的に発掘調査を続け、開発に伴う調査、史跡整備のための調査合わせて今年度で 21 次を数える。

（1）　土塁

土塁は、一部が庫裏の北側に残存する。これまでの調査では、中心部まで断ち割ったことはなく、上層の堆積状況の確認のみである。内土塁には、江戸時代末期に版築により再構築された痕跡が認められた（4 次、写真2）。残存土塁以外の場所では、境内北西にて土塁を崩してできたと推察される堆積が確認されている（7・20 次、写真 3）。その堆積層と戦国期の堀の埋土、そして地山の土質が、酷似していることから、堀を掘って出た土で土塁を構築し、その後土塁は崩され、一部は堀の埋土となった可能性が考えられる。江戸時代前期に成立した『三河物語』には、一揆方の降伏後、家康の命により堂宇は破却されたとある。堀と土塁も同様に壊されたと推測される。

（2） 堀

これまでのところ、堀の掘削時期は、大きく戦国期（16 世紀前半）と江戸時代後期（18 世紀後半～ 19 世紀前半）の 2 時期と捉えることができる（図3）。

戦国期の堀は、断面V字状を呈し「薬研堀」のように急傾斜である。深さは、圃場整備で削平されているところでは 1.3 m程度（15 次）であるが、残りのよいところでは約 4 m（20 次、写真4）を測る。幅はおおむね 5 m程度である。

江戸時代前・中期については、再掘削された痕跡が確認された調査区もあるが、寺内全体で一律に行われた様子はうかがえない。おそらく、恒常的な管理の一環であったと推測できる。

江戸時代後期の再掘削の痕跡は、ほぼすべての調査区で確認されており、明確な意図を持って再整備されたようである。特に境内の南西で、戦国期には推定 5 mほどだった幅が、倍近くの約 8 ～ 10 mに拡張されている一方、深さは戦国期の堀より 0.4 ～ 1 m程度浅く、断面が緩傾斜の皿状になっていた（5・16・19 次、写真 5）。

堀について、もうひとつ明らかになったことは、戦国期の堀の巡り方と江戸時代後期の堀の巡り方が必ずしも一致しないことである。庫裏のある区画を巡る内堀は、戦国期の堀が確認できているが（20 次）、その一方で、本堂のある区画を巡る内堀では、戦国期に遡る痕跡が確認できていない（17 次）。また、寺内東側の出入り口付近では、現存する外堀から数m離れた場所に戦国期の単期のみで埋没した外堀が確認された（18 次）。

また、本堂の区画を巡る内堀の東側一辺には石垣が築かれているが、裏側を調査したところ、江戸時代後期以降に築造されたもので、裏込めはなかった（20 次、写真6）。

以上のように、江戸時代後期に外堀の一部が大きく再整備され、本堂を巡る内堀が新設された理由は、地域の中核を担う中本山・触頭寺院としての寺格や権勢を顕在化するために、主要な堂宇を建立するなど寺観整備を行い、その一環として堀も再整備されたと推測される。

（3）寺内

寺内については、境内の西と東で様相が異なる。大門から東へ約 50 mの辺りで、戦国期の掘立柱建物や区画溝、鍛冶関連遺構が確認された（9 ～ 12 次）。江戸時代の伽藍絵図にあるとおり、境内の東側は戦国期から「百姓家」が存在したことが明らかになった。また、戦国期以前、本堂の西から外堀までの範囲は、湿地状になっていたことが分かっている（16 次）。江戸時代には湿地は埋まりつつあったようだが、伽藍絵図の西側に建造物などは描かれておらず、空白地になっていることと矛盾しない。

（4）境内

境内の中は、これまで調査の機会がほとんどなかったため、境内や堂宇がどのように形成され変遷してきたのかということが分かっていない。庫裏付近（1 次）や庫裏の西から外堀までの間（16･20 次）で 15 世紀代の遺物がまとまって出土していることから、創建期～室町時代は、境内の中心が庫裏のある区画にあった可能性があるという指摘もある。

4　おわりに

安城市では、境内の西側を中心とした史跡整備を計画している。今後も調査を継続し、本證寺の歴史と文化財を守り伝えていきたい。

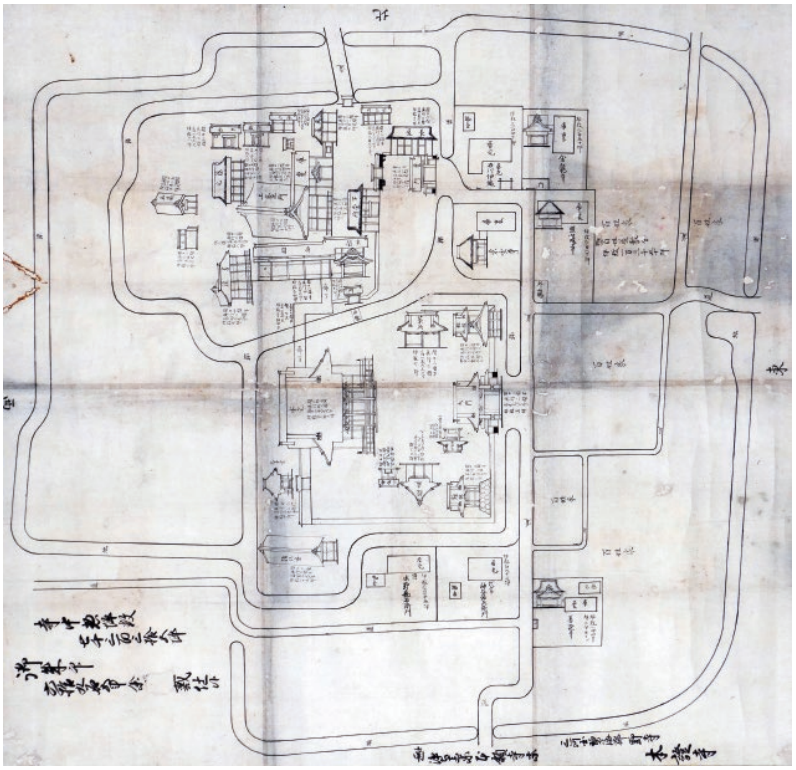


図１　伽藍絵図

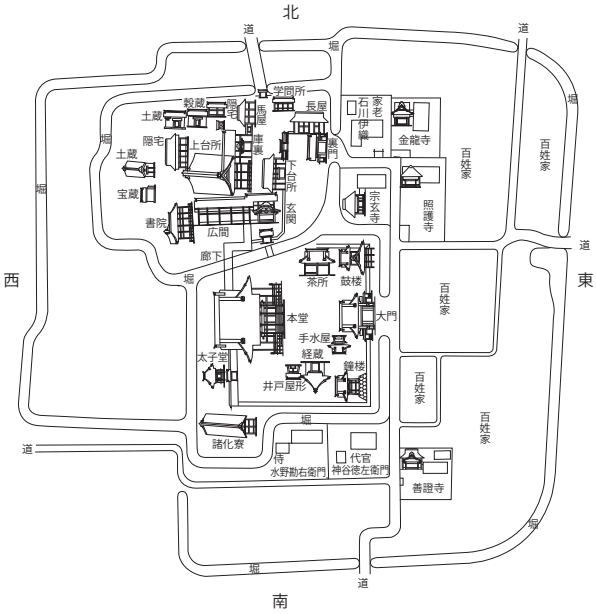


図１’　伽藍絵図トレース

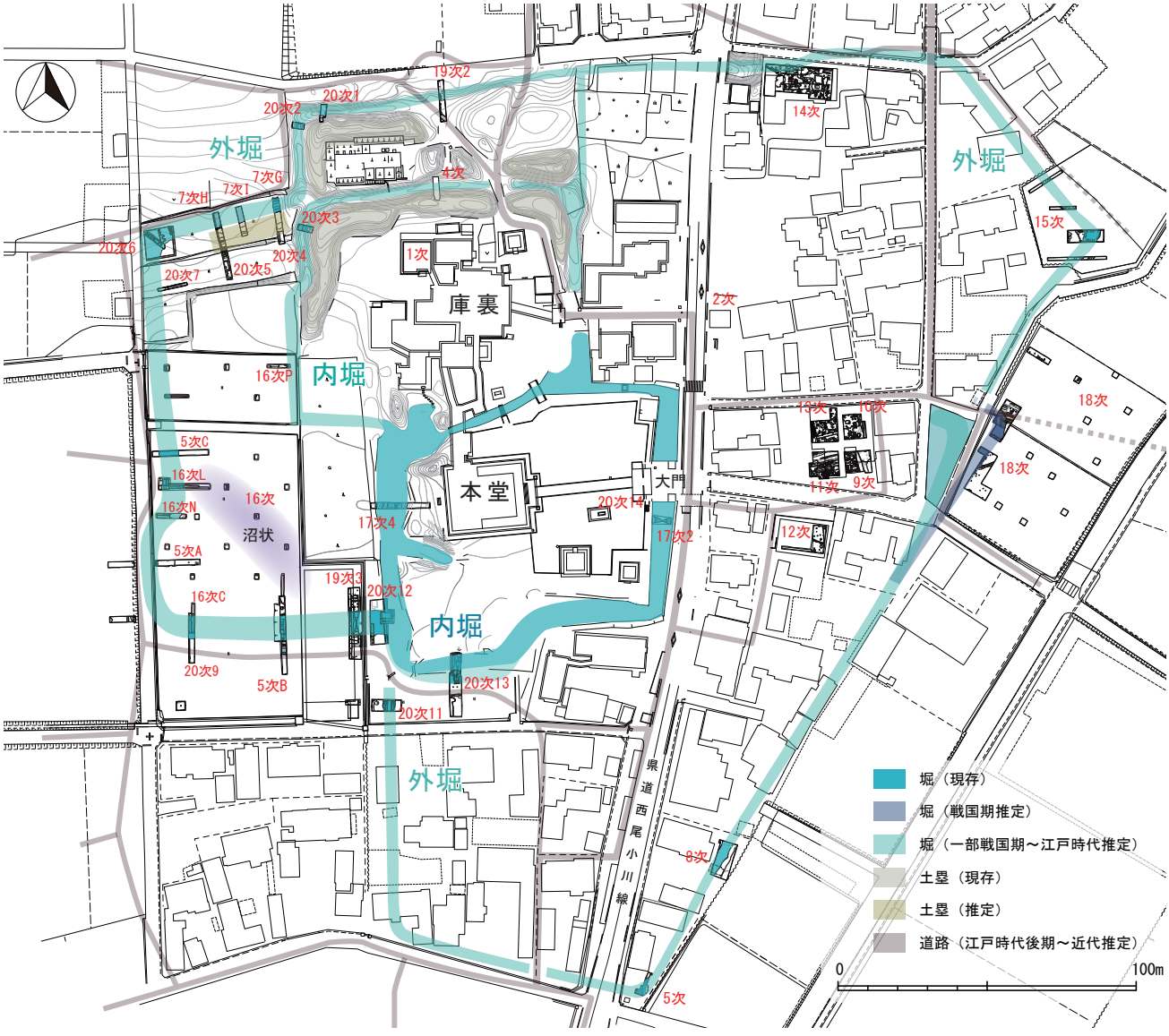


図２　堀位置推定復元図

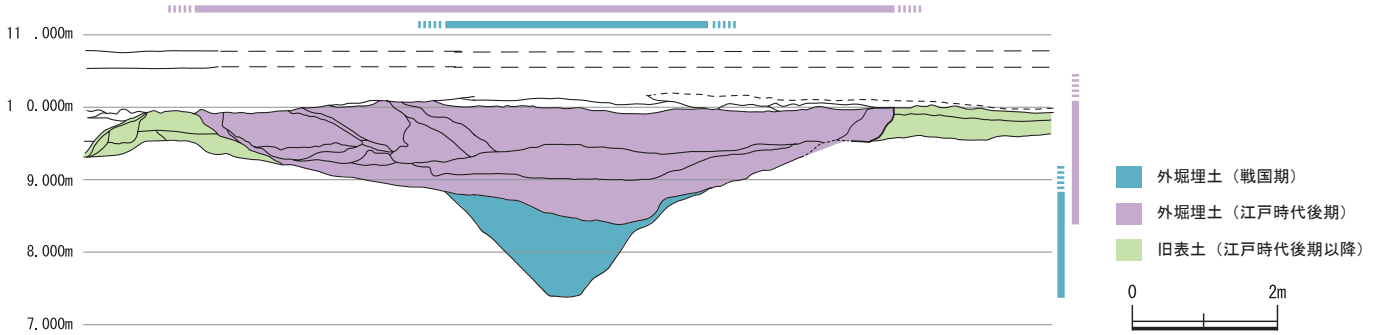


図３　５次調査Ｂ区西壁断面図

写真１　本證寺境内（南から）

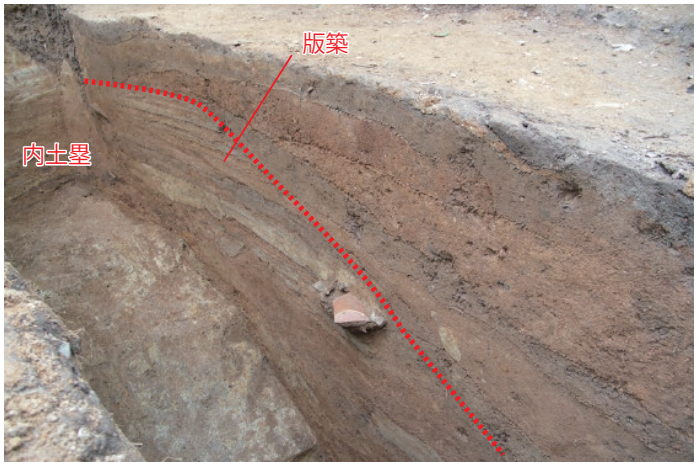


写真２　４次調査区江戸時代末期の内土塁の版築（東から）

写真３　７次調査Ｇ区外堀（北東から）

写真４　20 次調査３区内堀（南から）

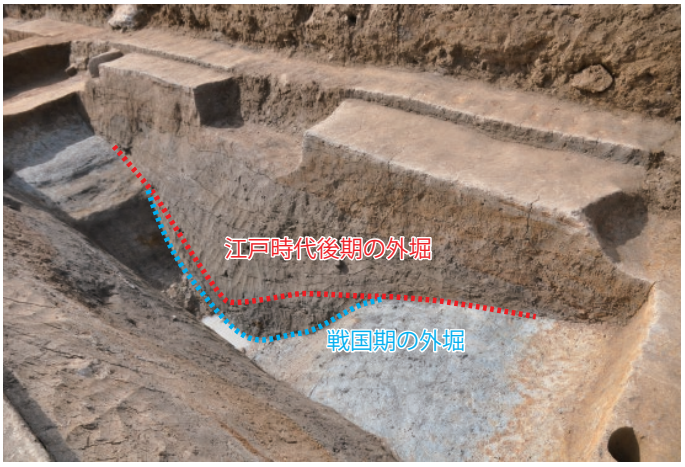


写真５　19 次調査３区外堀（西から）

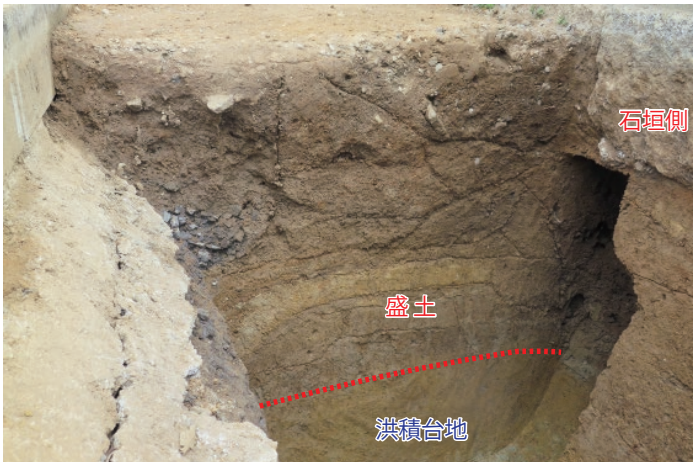


写真６　20 次調査 14 区石垣の裏（南から）

講演

戦国期城郭から織豊期城郭へ–東海・九州の事例を中心に–

九州国立博物館展示課　主任研究員　岡寺　良

はじめに

日本全国には、３～４万ヶ所もの城郭が存在すると言われているが、その大半は戦国期に築造されたものである。戦国期城郭には、江戸時代の城に見るような立派な天守閣などの建築物は残されていないが、建築物の基礎となる造成（普請）の痕跡は如実に見ることができる。

城郭の建設は、大きく普請（土木造成）と作事（施設建設）によって構成される。通常、城をイメージする場合は、天守閣のような作事面に注目されがちであるが、基本的に戦国城郭には、作事部分は残されておらず、発掘調査によって僅かに明らかになる程度である。一方、現地の山城を訪れたことがある人ならば良くわかると思うが、中世の山城には、建物などを建てた「曲輪」が数多く残り、その周囲を防御するために、「土塁」や、「竪堀」や「横堀」などの「空堀」、平地の城には「水堀」などもある（図１）。また、九州北部には「竪堀」を何本も並べ、時には横堀などとも組み合わせる「畝状空堀群」という奇妙な防御遺構が積極的に使用される。これら土木造成の総合体が城郭の「普請」部分であり、現在、戦国城郭で、地表に残されているのは、普請部分のみであると言えるだろう。とはいえ、城跡がある現地を訪れれば、このような城の普請＝土木造作の痕跡を如実に見ることができ、往時の姿を彷彿とさせてくれる。

さて、東海地方にも全国と同じように数多くの戦国期城郭が築造されたが、ご存じのとおり織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の戦国の三傑を輩出したことにより、城郭の構造変革が行われた「震源地」でもあった。その構造変革によって、産み出された城郭が「織豊系城郭（織豊期城郭）」である。

本発表では、発表者の研究フィールドとしている九州地方の城郭と比較をしつつ、東海地方でなされた戦国期城郭から織豊期城郭への変革の在り方、さらにその広がりについて見ていくこととしたい。

１　東海地方の戦国期城郭

戦国期城郭の事例　東海地方の中心である木曽三川が形成した広大な濃尾平野には、統治の拠点として平地に城館が築かれた。

岩倉城（愛知県岩倉市）は、尾張北部（葉栗郡・丹羽郡・中島郡・春日井郡）を治める拠点として、濃尾平野の五条川に面した標高約 10m の平地に築かれている。発掘調査等の成果により、幅 10～20m の二重の堀で囲まれた一辺約 200m の方形の居館であることが判明している（図２）。地割などから居館の周囲には、武家居館としての小型の方形区画が並立していたものと考えられる。

清須城（愛知県清須市）もまた、尾張南部（海西郡・愛知郡）を治める拠点として、岩倉城のさらに下流域の清州に築かれた。発掘調査によって 15 世紀後葉～16 世紀前半の堀が複数発見されていて、堀と土塁を有する方形居館があったものと考えられている（図３）。守護斯波氏と守護代織田氏のそれぞれ居館が存在した説も出されているが（千田 2013）、全体的な構造は未確定である。いずれにしても複数条の堀囲いによる方形居館、これが戦国期濃尾平野の城郭の一般的な姿であった。

ちなみに山間部においても戦国期城郭の築城はなされており、例を挙げれば**岩略寺城**（愛知県豊川市・図４）は、標高約 150m の山中に土塁で囲まれた方形の主郭を有し、その周囲の尾根上には連郭式の曲輪群を配している。基本的には自然地形に即した曲輪造成による築城であると言えるだろう。

武田・徳川氏の「丸馬出」　駿河から三河にかけての地域には、武田氏あるいは徳川氏が構築した「丸馬出」という施設を持つ城が確認できる。馬出とは曲輪の塁線から土橋などを通じて張り出した防御空間で、敵からの攻撃を防御して主郭への攻撃を妨げると共に、城内側から反撃に出る際に、いち早く曲輪外へ軍勢を繰り出すことのできる橋頭堡としての役割を果たしたものであり、後の織豊系城郭にも採用されていくものである。

典型的なものは**諏訪原城**（静岡県島田市）が挙げられるが、三河でも有名な**長篠城**や**古宮城**（共に愛知県新城市）がある（図５）。武田氏か徳川氏かどちらかの論争は決着していないものの、双方が交戦を繰り返すうちに地域的に共有された防御施設とみなすこともできよう。

２　戦国期城郭から織豊期城郭へ

居城の山城化　16 世紀も半ばを過ぎてくると、戦乱がますます激化して日常化していくことにより、守護クラスの勢力でも、日常的な居城を山地部に求めていくことになる。近江では、**小谷城**（滋賀県長浜市・図６）や**観音寺城**（滋賀県近江八幡市・図７）は、それぞれ浅井氏、六角氏という近江を二分した守護級の勢力が居城とした山城である。これらの城には、先進的に石垣の使用も確認することができる。

小牧山城・岐阜城の築城　平地居館が主流であった濃尾平野においても、近江で見たような居城の山地・丘陵部への移転を行ったのが、織田信長である。信長は尾張守護代の三奉行の家筋の生まれだったが、弘治元年(1555)に、**勝幡城**（愛知県愛西市・稲沢市）から前述の清須城に入城し、斯波義銀を尾張守護として迎え入れた。その後、永禄３年（1560）に桶狭間の合戦で、駿河の今川義元を敗死させ、同６年には居城を小牧山城に移転した。

小牧山城（愛知県小牧市・図８）は、濃尾平野の北東部、標高 85m の独立丘陵・小牧山を城郭化したもので、主郭の周囲には巨石を用いた野面積みの石垣が３段にわたって確認されている。一気に高石垣を積む技術は有していないものの、段築状の石垣構築によって、自然地形に影響されない城郭の設計を実現しようという意図や、複数段を連ねたり、巨石を用いることで、視覚的にも石垣面を強調して見せようという意図など、後の織豊系城郭につながる革新性が生まれ始めたと言える。

永禄 10 年（1567）、美濃国を手に入れた信長は、居城を濃尾平野の最奥部、金華山山頂（標高 329m）の稲葉山城に移転し、「岐阜城」と改めた。**岐阜城**（岐阜県岐阜市・図９）では、山頂部と山麓部に城郭遺構が集中しているが、山麓居館部は、発掘調査によりかなり明確に構造が分かってきている。山麓部には、巨石列による導線設定と、石垣構築による曲輪造成が行われている。入口虎口部分には、視覚効果を狙った巨石列を使用し、曲輪を造成するためにある程度高い石垣を構築した。小牧山城で行われていた巨石積みの発想を引き継ぎ、小牧山城よりも高く積む石垣構築を実現している。ただし、石垣の隅角部は未完成の算木積みであり、完成した算木積みの高石垣までの技術は獲得していない。

その一方で、山麓居館部からは、金箔を貼った棟瓦が出土しており、棟瓦のみではあるが、建物への金箔瓦使用が認められる。

安土城築城 石垣・瓦・礎石建物　元亀３年（1572）、越前の朝倉氏、近江の浅井氏を滅亡させ、さらに天正３年（1575）には長篠の合戦で武田勝頼を破った信長は、東海・北陸から畿内にかけての一帯をほぼ平定した。そして翌年、安土城の築城を開始し、天正７年（1579）には岐阜城を嫡男信忠に与え、安土に入城する。**安土城**（滋賀県近江八幡市・図10）は琵琶湖を望む標高198mの安土山山頂に築かれ、山頂一帯には、高石垣で固められた曲輪群、総瓦葺の礎石建物、軒丸瓦には金箔瓦が用いられた。

高石垣の技術は、前述のように近江では観音寺城でも採用されていたが、高石垣の上面には、瓦葺で礎石立ちの豪壮な櫓建築が構えられるという点で、それ以前の戦国期城郭とは明らかに一線を画している。

安土築城以前から、既に京周辺の信長家臣の城郭では、瓦や天守建築が採用されていた。明智光秀の坂本城（滋賀県大津市）や細川忠興の勝龍寺城（京都府長岡京市）である。京周辺は寺社建築など古くから瓦葺き建物が多く建造されてきた地域であり、それらの技術が安土城にも採用されたものであろう。

この石垣、瓦、礎石建物が揃った安土城が、近世城郭へとつながる織豊期城郭の誕生であるといえるだろう。

設計プランの変革　枡形虎口　安土城では、石垣・瓦・礎石建物のハード面のみならず、設計プランにおいても先進性を見せていた。それは山頂の天守を中心にそこから階段状に曲輪が展開しているが、その曲輪間に設けられた虎口は、複雑な折れを有する枡形構造を呈していた。安土城黒鉄門は、まさにそれが如実に表れており、その存在が中心曲輪の求心性を高める装置となっていた。

このように、安土城で一定完成された織豊系城郭はさらに豊臣秀吉の段階に入り、発展を遂げ、近世城郭へと引き継がれていくが、まさにその発生源となったのは、東海地方であったということができるだろう。

３　九州地方の戦国期城郭

ここでは、織豊系城郭の全国的な波及状況を比較するため、報告者の研究フィールドである九州地方の事例を見ていくこととしたい。

戦国期九州の情勢　戦国時代末期の九州地方では、豊後の大友宗麟、肥前の龍造寺隆信、薩摩の島津義久・義弘の三大勢力があり、さらには、それ以外の地域においても様々な国人（国衆）勢力が割拠していた。その中でも極めて優位だった大友勢力が、天正６年（1578）に高城・耳川合戦で島津勢に敗れ、さらに同 12 年には龍造寺隆信が沖田畷の合戦にて島津勢により敗死し、同 14 年には九州全域の大半を島津氏が押さえることになるが、大友宗麟の要請により毛利を初めとする豊臣秀吉勢が来援、翌 15 年に九州は豊臣政権によって平定されるに至る。

九州北部の城郭の事例　九州北部の山城は基本的には日本中世の一般的な連郭式である。防御遺構については、土塁や空堀（横堀・畝状空堀群）も一般的に認められるが、東海地方等とは異なり、虎口に対する関心は低く、曲輪周辺の斜面防御に対する関心が高かったと言えよう。

古処山城（福岡県朝倉市・嘉麻市・図 11）は、筑前の最有力国衆・秋月氏の居城で、標高 800m を越える高山・古処山山頂にある。南北に曲輪群が分かれており、それぞれの曲輪群に畝状空堀群が数十本ずつ構築されている。

同じように、**長野城**（福岡県北九州市小倉南区・図 12）や、**高鳥居城**（福岡県須恵町・篠栗町）も畝状空堀群を多数有する縄張りとなっており、秋月方の勢力による大友・豊臣氏に対する厳重な防備と想定される（岡寺

2020)。

このように畝状空堀群が構築される巨大な城郭がある一方で、西北九州に目を向けると、円形単郭プランの小規模城郭群が多数確認できる（図 13)。独立丘陵あるいは尾根の突端部に横堀を巡らした小型円形の主郭のみを有するものである。当地は松浦党と呼ばれる小領主集団が各地に割拠しており、その様子を反映した「**松浦型プラン**」と呼ばれる（木島 1992)。

九州南部の城郭の事例　一方、九州南部の城郭は、他の地域とは異なる「群郭式」と呼ばれる縄張りの城郭が数多く認められる。

群郭式とは、同規模、同高度の曲輪が並列的に配置されるもので、曲輪間は非常に深い横堀が掘られるものである。**志布志城**（鹿児島県志布志市・図 14）や**都於郡城**（宮崎県西都市）などが事例として挙げられるが、このようなプランが生まれてきた要因として、群郭式を形成しやすいシラス台地という①地理的要因、曲輪周辺の切岸を防御の柱とする②縄張り的要因、主郭の求心性を必ずしも追求しない③家臣団編成的要因があるものと考えている。

４　九州地方の織豊期城郭の導入

前述のように天正 15 年（1587）に豊臣秀吉によって平定された九州は、南部と北部で領主の配置転換の在り方が異なる。それが豊臣系の織豊期城郭の導入の在り方にも大きく作用している。

豊臣系大名の事例　主に九州北部を中心に豊臣系大名の入部が見られ、豊前（黒田孝高・毛利勝信)・筑前（小早川隆景)・筑後（毛利信包)・肥後（加藤清正・小西行長）に配置される。移封直後の段階では、黒田氏の居城・**中津城**（大分県中津市）や、小早川氏の居城・**名島城**（福岡県福岡市東区)、関ヶ原合戦後の慶長期では**福岡城**(福岡市中央区)、**熊本城**(熊本県熊本市中区)が挙げられるが、これらは、石垣・瓦・礎石建物の織豊系城郭の３要素を備えているのは無論のこと、城内の要所に枡形虎口を備え、主郭の求心性を体現した純粋な「織豊系城郭」のプランそのものだった。

旧族系大名の事例　一方で、同じ九州でも肥前（鍋島直正（龍造寺後継)・松浦隆信)、豊後（大友義統)、筑後（立花宗茂)、薩摩・大隅（島津義久・義弘）などの城郭でも織豊系城郭の築城技術の導入はなされている。

しかしながら、**佐賀城**（佐賀県佐賀市・鍋島氏の居城・図 15)、**梶谷城**（長崎県松浦市・松浦氏関連の城・図 16)、**栗野城**（鹿児島県湧水町・島津義弘の居城・図 17）などの事例を見ると、虎口を枡形虎口に行い、石垣、瓦、礎石建物を有する織豊系の築城技術の導入は認められるが、あくまでも虎口部分に留まる事例が多く、縄張りプランを見ると、枡形虎口を幾重にも重ねて求心性を高めるようなものとはなっておらず、旧来的な曲輪群が並列的に配置される群郭式あるいは松浦型プランがそのまま踏襲されている。

変革するものとされないもの　以上のように九州における織豊系城郭の導入・展開については、天正 15 年の秀吉の九州平定を契機に、朝鮮出兵のための肥前名護屋城築城による技術習得によって実現されていくが、その在り方は大名の出自（豊臣系か旧族系か）及び家臣団編成の在り方によって異なっていた。これは織豊系城郭の築城技術が生み出されてきた東海・近畿地方とは大きく異なり、九州地方の城郭発展・展開の大きな特徴ということができるだろう。変革されるものと変革されないものがあり、これを独自的な取捨選択と呼ぶべきか、完全織豊化することのできない限界と呼ぶべきか、議論を要するところであろう。

【参考文献】
内堀信雄 2013「織田氏の城、小牧山城・岐阜城」『織豊系城郭の出現と成立前夜』(織豊期城郭研究会 2013 年度 高槻研究集会資料集)
岡寺良 2020『戦国期北部九州の城郭構造』吉川弘文館
木島孝之 1992「九州における織豊期城郭―縄張り構造にみる豊臣の九州経営―」『中世城郭研究』第六号 中世城郭研究会
木島孝之 2001『城郭の縄張り構造と大名権力』九州大学出版会
文化庁文化財部記念物課 2013『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』
中井均・鈴木正貴・竹田憲治編 2020『東海の名城を歩く』愛知・三重編 吉川弘文館
中井均・内堀信雄編 2019『東海の名城を歩く』岐阜編吉川弘文館
仁木宏・福島克彦編 2015『近畿の名城を歩く』滋賀・京都・奈良編 吉川弘文館

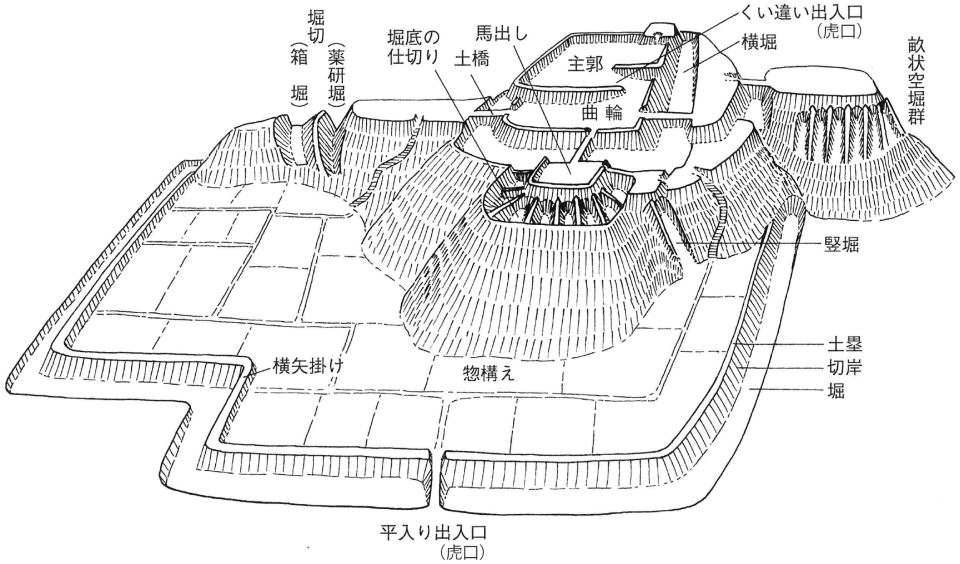
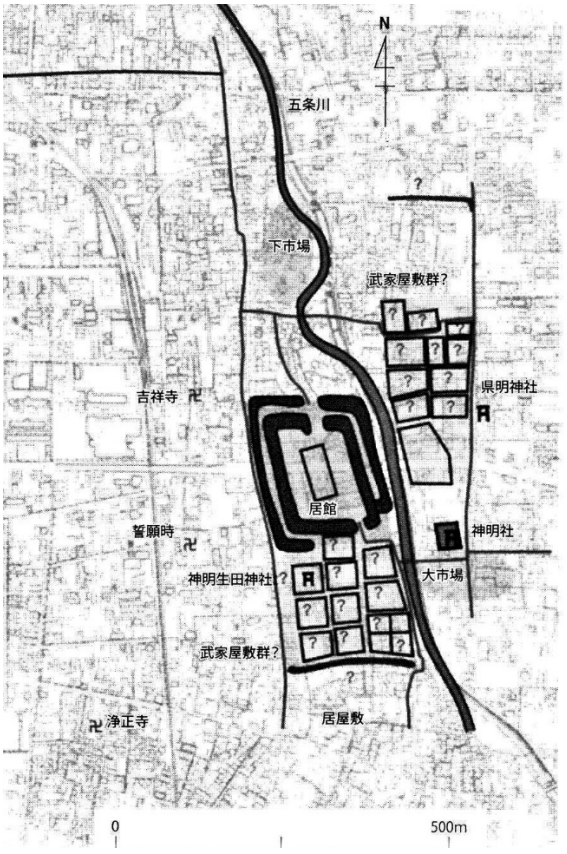


図１　戦国期・織豊期山城各部名称（文化庁 2013 を改変）



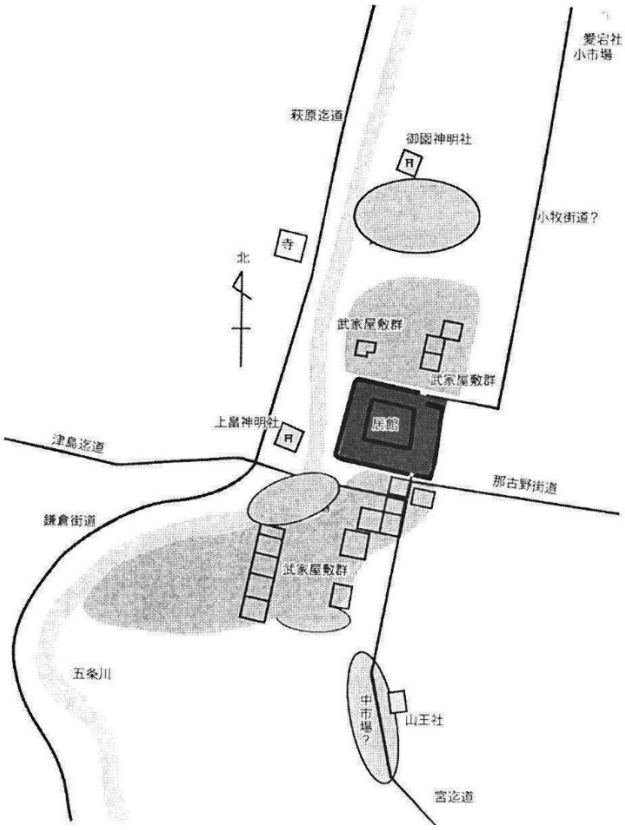
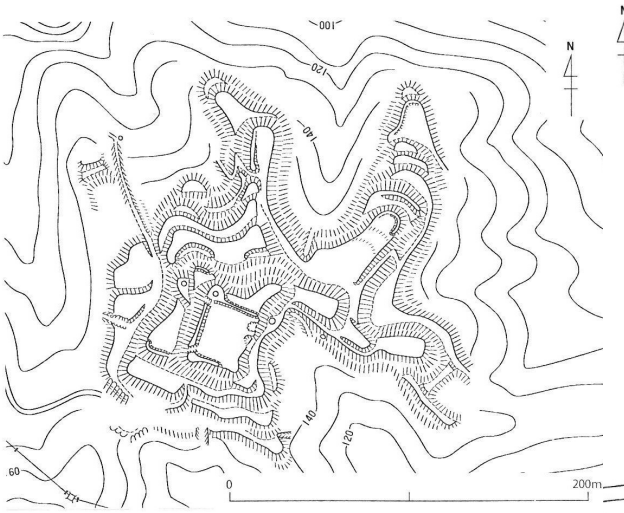
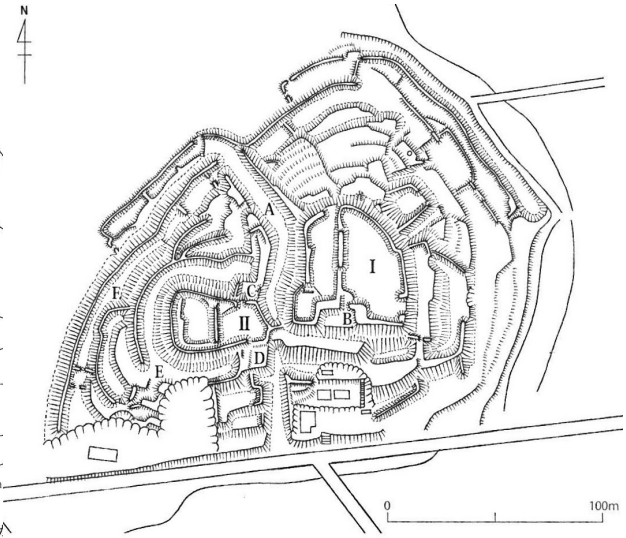


図２　岩倉城復元縄張り図（中井・鈴木ほか編 2020）　図３　清須城復元縄張り図（中井・鈴木ほか編 2020）



●岩略寺城縄張図（『中世城館跡調査報告書Ⅲ』愛知県教育委員会 1997 から転載）



●古宮城縄張図（作図：中井均）

図４ 尾張の山城の事例（岩略寺城・中井・鈴木ほか編 2020） 図５ 馬出を有する事例（古宮城・中井・鈴木ほか編 2020）

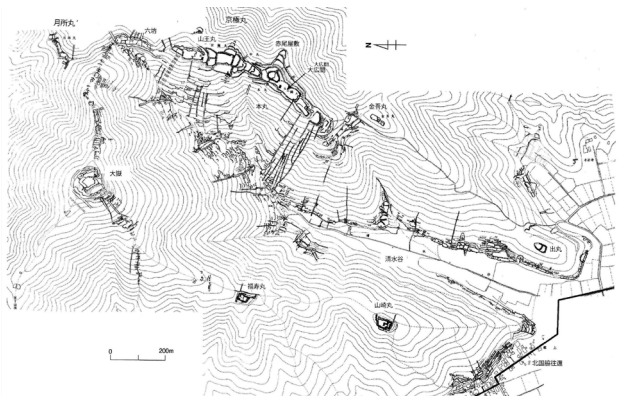


図６ 小谷城（仁木・福島編 2015）

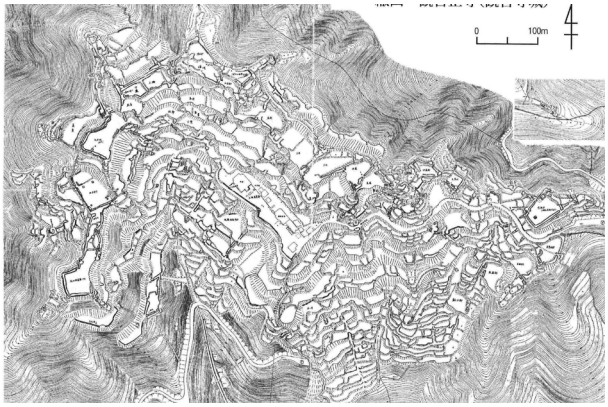


図７ 観音寺城（仁木・福島編 2015）

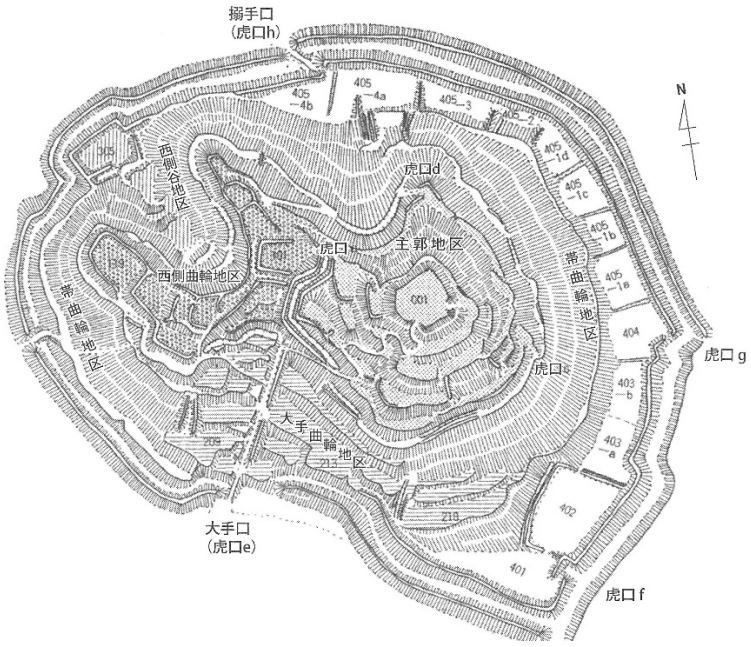


図８ 小牧山城（中井・鈴木ほか編 2020）

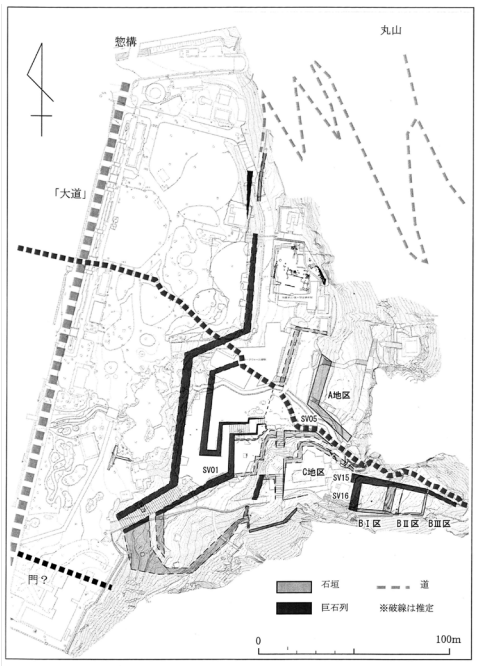


図９ 岐阜城山麓居館部分復元地形図（内堀 2013）

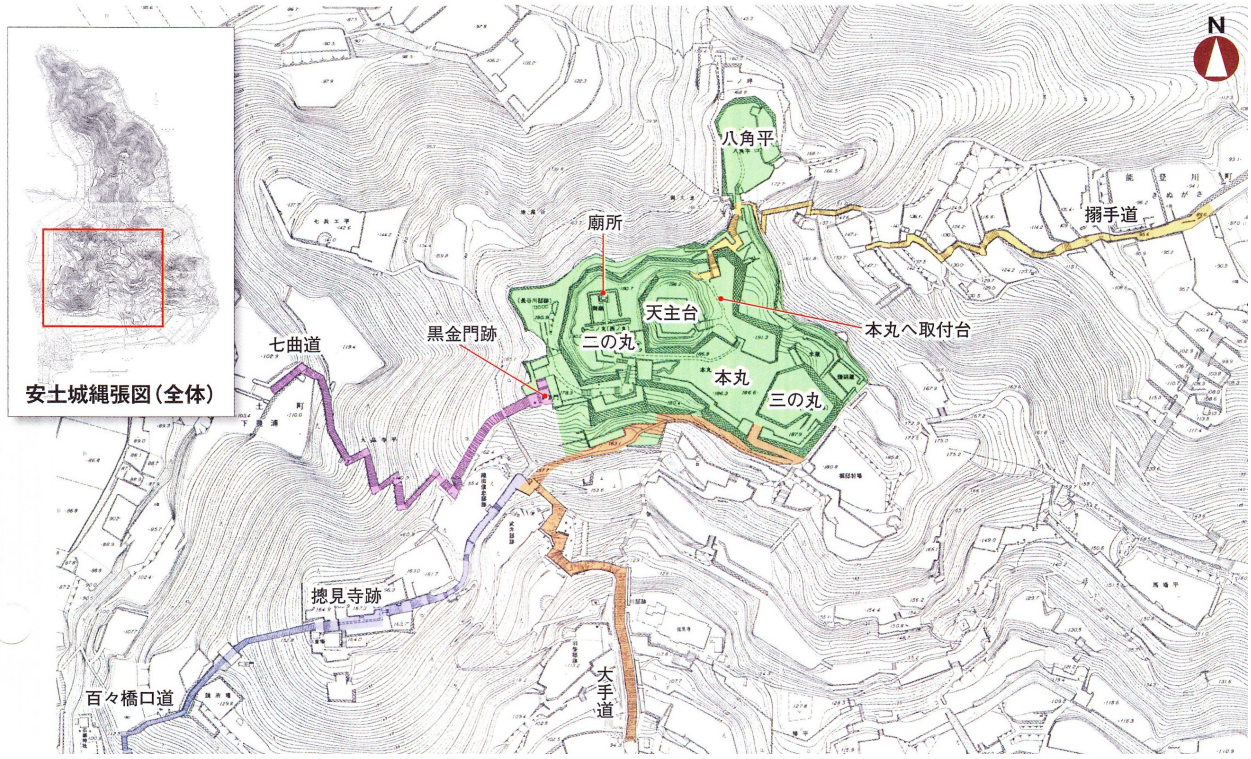


図 10　安土城主要部（『週刊日本の城』から転載）

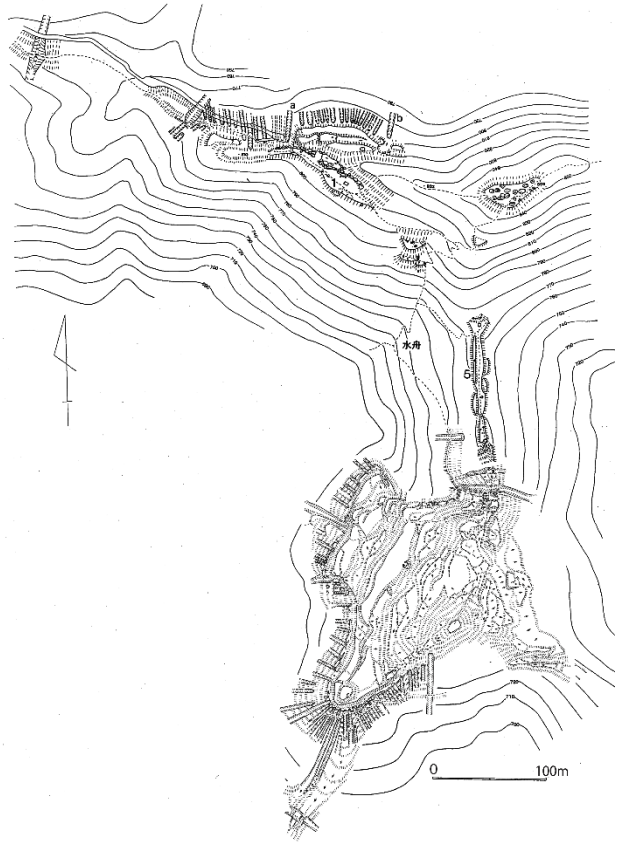


図 11　古処山城（岡寺作成）

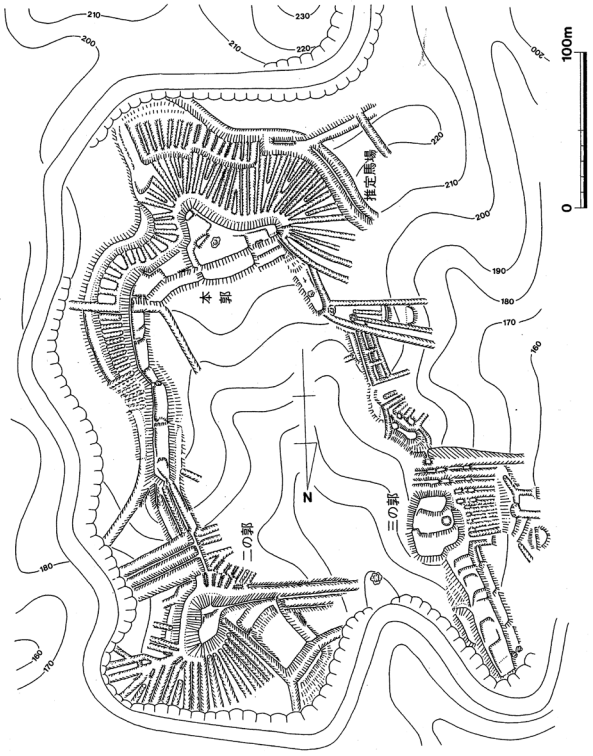


図 12 長野城（村田修三・千田嘉博作成）

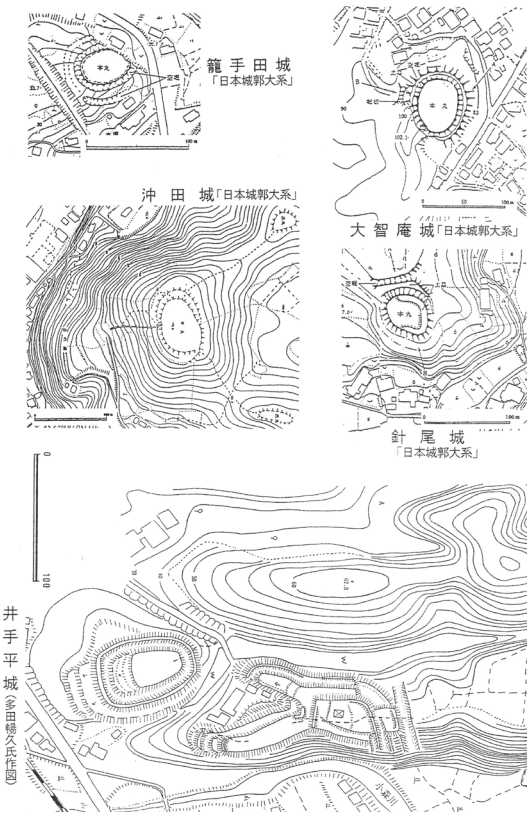


図13　「松浦型プラン」の事例（木島1992）

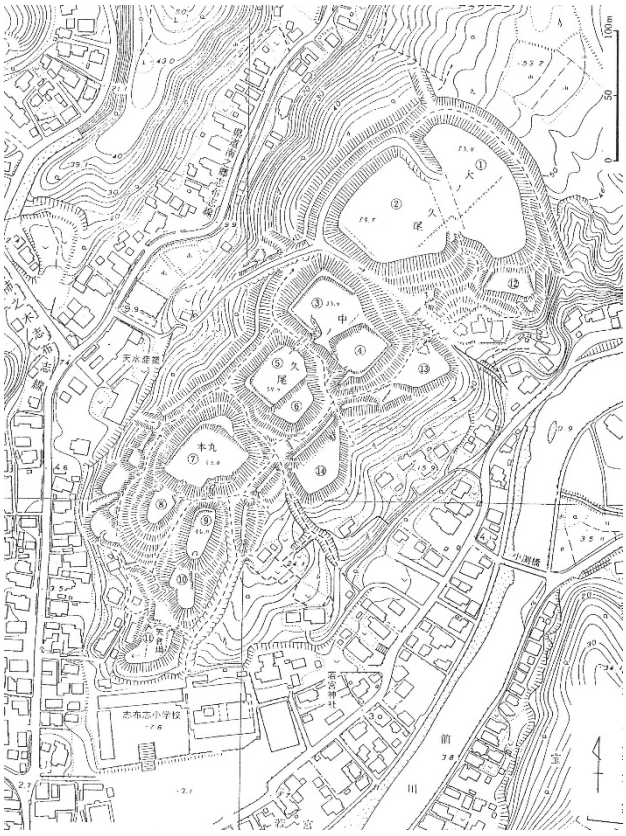


図14　群郭式の事例（志布志城（内城）・村田修三作成）

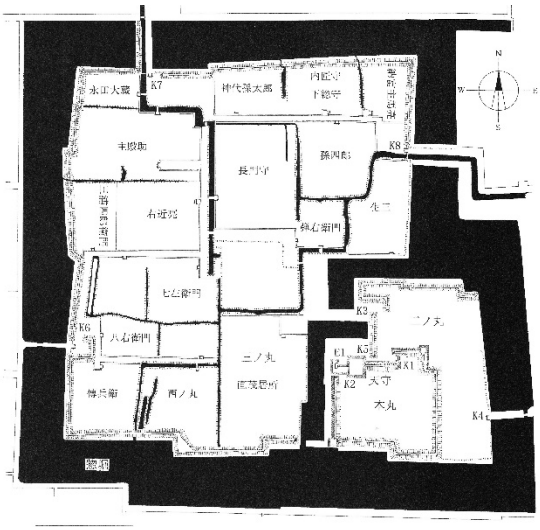


図15　佐賀城縄張り図（木島2001）

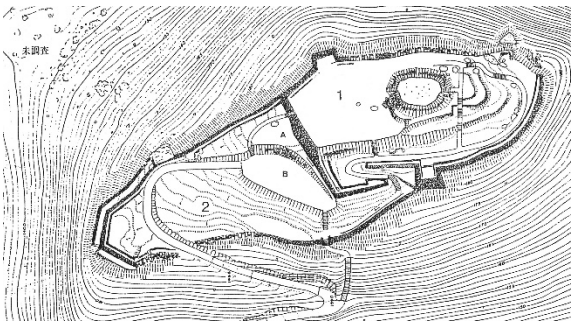


図16　梶谷城縄張り図（木島1992）

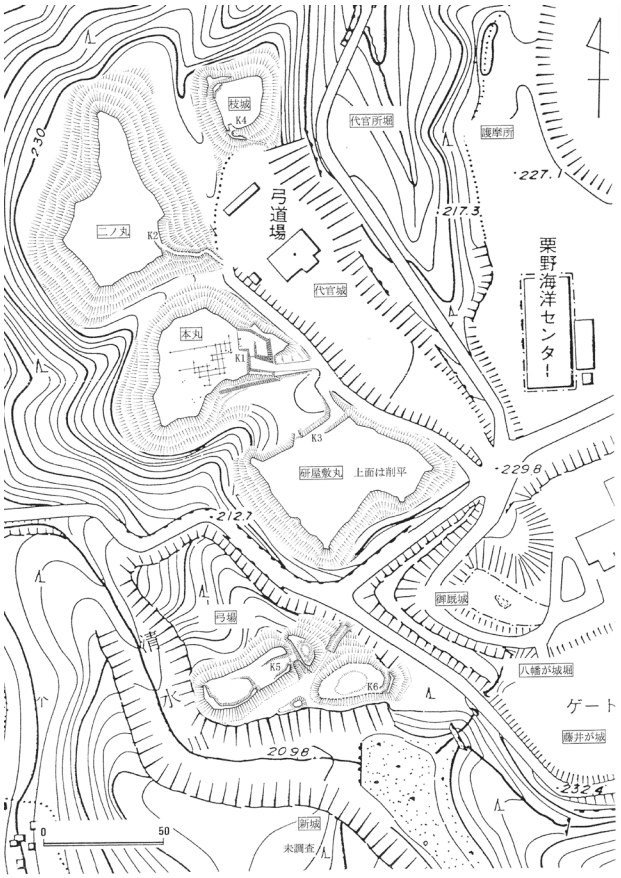


図17　栗野城縄張り図（木島2001）

岡崎城跡の発掘調査と史跡整備

岡崎市教育委員会　山口　遥介

1　岡崎城の歴史

岡崎城の本丸は北東の甲山から延びる丘陵先端の「龍頭山」に立地する。菅生川に面した地形を利用し、15 世紀中頃に西郷頼嗣がこの地に初めて砦を築いたのが岡崎城の始まりとされる。

16 世紀前半には松平氏の本拠となり、天文 11 年（1542）に城内で徳川家康が誕生する。家康は永禄 3 年（1560）から元亀元年（1570）に浜松城へ移転するまでの間、岡崎城を本拠とし三河平定を果たす。その後も天正 18 年（1590）に関東移封になるまで岡崎城は徳川領国の重要な城であった。

天正 18 年に豊臣大名の田中吉政が城主になると天守が建てられ、堀や土塁に石垣が築かれるなどの大規模な城郭整備が行われる。これを基盤に江戸時代にも整備が引き継がれ、17 世紀中頃に近世岡崎城は完成をみる。

岡崎城は城と城下町を堀や土塁で囲む「総構え」の城で、総構えの範囲は東西約 1.5km、南北約 1.0km にも及ぶ大城郭であった。総構え内には東海道が往還し、屈曲の多さから「二十七曲り」とよばれた。

表 1　岡崎城関連年表

西暦	城主（城代）	できごと		
1350				
		1351（観応2）	仁木義長、三河守護（守護代、西郷氏）	
1400		1399（応永6）	乙川付け替え工事	
		1429-41（永享年間）	西郷氏、明大寺に屋敷を築造	
1450	西郷氏	1452（享徳1）-86（康正1）	岡崎城築城	
	岡崎松平氏	1469-86（文明年間）	岡崎松平家成立	
1500	松平清康	1530（享禄3）	清康、本拠を岡崎城に移す	
	（松平信孝）	1535（天文4）	清康死去（森山崩れ）、松平信孝入城	
	松平広忠	1537（天文6）	広忠、岡崎城復帰	
		1542（天文11）	家康誕生	
	今川氏城代	1549（天文18）	広忠死去	
1550	松平元康（家康）	1558-70（永禄年間）	「権現様御縄張之由」	
		1560（永禄3）	桶狭間の戦い	
		1561（永禄4）	元康、織田氏と結ぶ	
		1563（永禄6）	三河一向一揆起こる	
	松平信康	1570（元亀1）	家康、本拠を浜松城へ移す	
		1578（天正6）	岡崎城改修、家臣の「岡崎在郷」	
	石川数正	1584（天正12）	小牧・長久手の戦い	
		1585（天正13）	石川数正、豊臣方へ出奔、岡崎城改修	
		1586（天正14）	家康、秀吉の臣下となる	
	本多重次			
	田中吉政	1590（天正18）	家康、関東移封	（年不詳）**天守築造**、総堀構築、東海道の城下引入れ
		1594（文禄3）	矢作川築堤	
		1598（慶長3）	矢作橋（土橋）工事開始、1601年頃完成	
1600		1600（慶長5）	関ヶ原の戦い	
		同年	吉政、筑後へ転封	
	本多氏	1601（慶長6）	本多康重、入封（本多氏4代【前本多家】）	
		1602（慶長7）	城東の馬出	
		1607（慶長12）	矢作川洪水	
		～1611（慶長16）	大林寺郭堀	
		1613（慶長18）	二の丸御殿建造	
		1617（元和3）	**天守再建**	
		1621（元和7）	白山曲輪、東西城門、総土塀等	
		1623（元和9）	二の丸御殿建造	
		1634（寛永11）	矢作橋（板橋）完成（以後、9回架け替え）	
		1644（正保1）	菅生川端石垣、西搦手門、西馬出	
1650	水野氏	1645（正保2）	水野忠善、入封（水野氏7代）	
		1654（承応3）	籠田総門、松葉総門（改修）	
1700		1670（寛文10）	御馳走屋敷を移転（上着町から）	
1750		1707（宝永4）	宝永地震による被害	
	松平氏	1762（宝暦12）	松平康福、入封	
	本多氏	1769（明和6）	本多忠粛、入封（本多氏6代【後本多家】）	
		1783（天明3）	2箇所（東曲輪等）の石垣修補の許可	
1800		1785（天明5）	4箇所（備前曲輪等）の石垣修補願	
1850		1837（天保8）	3箇所（隠居曲輪等）の石垣修補願	
		1863（文久3）	7箇所（隠居曲輪等）の石垣修補願	
		1866（慶應2）	5箇所（備前曲輪等）の石垣修補願	
	明治時代	1869（明治2）	本多忠直、岡崎藩知事	
		1871（明治4）	旧二の丸に額田県庁設置	
		1873（明治6）	廃城令	
		1873-74（明治6-7）	天守等解体	
1900	大正時代			
1950	昭和時代	**1959（昭和34）**	**復興天守完成**	

明治 6 年（1873）、いわゆる廃城令により天守を含む建物が取壊しを受ける。明治 10 年には旧城跡の一部が岡崎公園となる。昭和 34 年（1959）に天守が復興され、昭和 37 年には岡崎市指定史跡となった。

2　岡崎城跡の発掘調査の経緯

発掘調査は昭和 55 年（1980）の二の丸発掘調査を端緒にこれまで断続的に実施されてきたが、その多くは開発に伴う事前の発掘調査であった。一方で史跡整備を目的に、平成 16 年（2004）には「史跡岡崎城跡整備基本計画」が策定され、平成 29 年（2017）に改訂された。また、平成 30 年には「岡崎城跡石垣保存修理基本計画」も策定されている。現在は改訂策定された整備基本計画や石垣保存修理基本計画に基づき、岡崎城跡の遺構を積極的に把握することを目的に史跡内外で発掘調査や石垣調査を継続的に実施している。

表 2　整備基本計画に基づく発掘調査履歴

報告	No	調査年度	調査箇所		調査面積	現　況	成　果
☒	①	2016年度	総堀	菅生川端石垣	334.6㎡	河川敷	延長約400ｍ石垣
	②	2017年度	本丸	月見櫓	146.0㎡	史跡	櫓台石垣検出
	③		菅生曲輪	枡形門	105.0㎡	史跡	門礎石、堀跡検出
☒	④	2018年度	本丸	天守台	16.0㎡	史跡	金箔瓦出土
	⑤		総堀	-	138.7㎡	籠田公園	堀跡検出
☒	⑥		総堀	-	91.6㎡	御旗公園	堀跡検出
	⑦		総堀	菅生川端石垣	51.1㎡	河川敷	埋没石垣検出
	⑧	2019年度	総堀	籠田総門	27.5㎡	道路用地	堀跡検出
☒	⑨		本丸	清海堀	176.0㎡	史跡	新規石垣検出
	⑩	2020年度	浄瑠璃曲輪	大手門	33.8㎡	道路用地	大規模な撹乱
☒	⑪		坂谷曲輪	坂谷門	126.6㎡	史跡	枡形門礎石検出

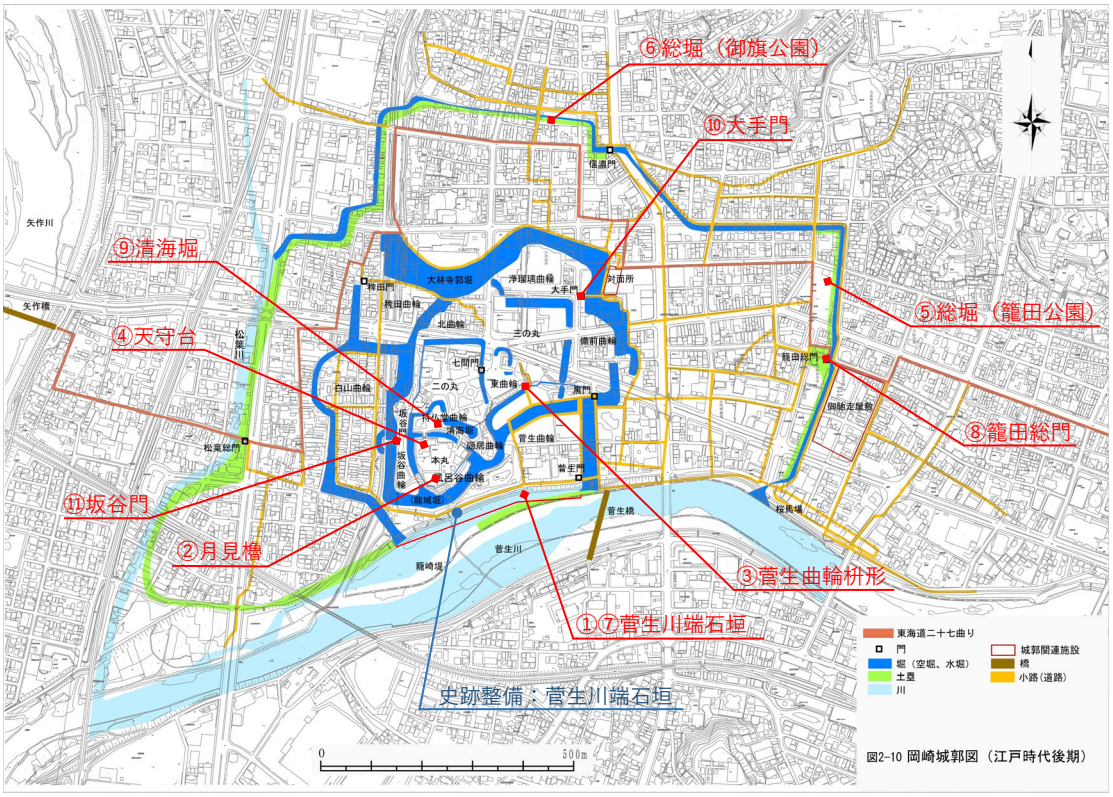


図 1　岡崎城郭図と調査地点

3　菅生川端石垣の発掘調査と史跡整備

(1) 2016・2018 年度…発掘調査

〇調査成果

・石垣根石及び胴木を検出し、石垣の高さが 5.4mであることが判明。

・石垣の東西端部を検出し、全長が約 400 mであることが判明。

・石垣の最下層の数段は構築当初の石垣が残り、城内の石垣の比較からは 17 世紀前半の構築が想定される。上部は複数回に渡る積み直しの痕跡が確認された。

・調査により石垣刻印が 12 種類 14 箇所確認され、岡崎城内では刻印の多い石垣といえる。

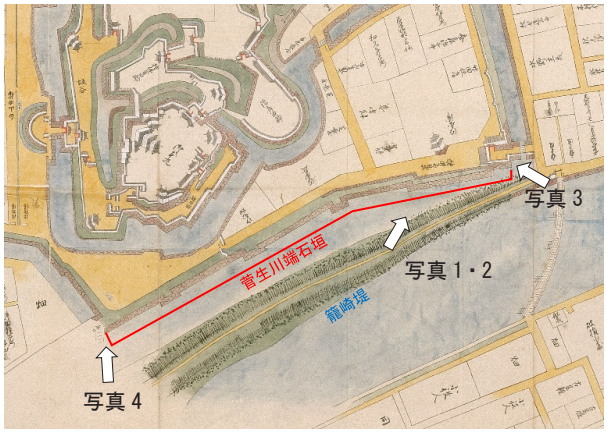


図 2　絵図（菅生川端石垣・籠崎堤）

写真 1　石垣検出状況

写真 2　根石・胴木

写真 3　石垣東端部

写真 4　石垣西端部

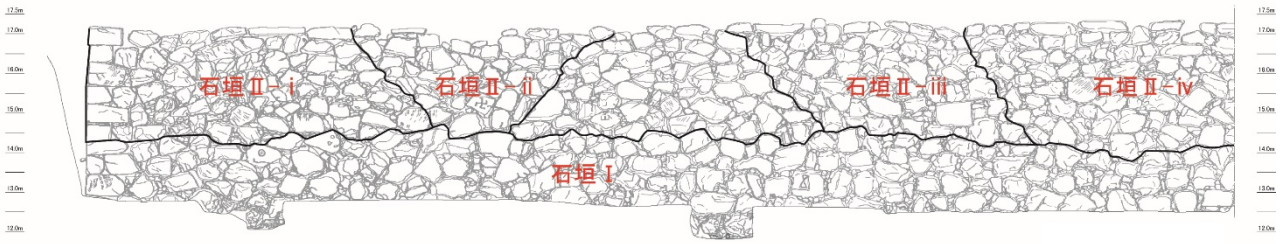


図 3　石垣積み直し状況（写真 1 の箇所、縮尺任意）

(2) 2019・2020 年度…史跡整備

〇整備の経過

・2019 年度は石垣沿いに園路を整備した。また中央枡形の石垣から生育した樹木の伐採を行った他、昭和期の石積み及び階段の撤去を行うなどの環境整備を行った。

・2020 年度には中央枡形石垣の解体・積直し整備を行った。

・2021 度は西枡形石垣の整備を予定している。

写真 5　中央枡形整備前

写真 6　2019 年度整備

写真 7　2020 年度整備

4　その他の発掘調査成果

（1）天守台石垣発掘調査（2018 年度）

・天守台石垣の根石を確認。
・本丸整地層を確認。整地層から中世の遺物が出土。

写真 8　天守台石垣発掘調査（天守台石垣南面）

（2）総堀発掘調査（2018 年度）

・市街地における遺構の残存を確認。
・総堀が旧地形を利用して構築されていることを確認。

写真 9　総堀発掘調査（土塁断面）

（3）本丸清海堀発掘調査（2019 年度）

・中世以来の名残を残す堀として認知されていたもの。
・石垣の根石を確認。
・本丸側の法面下に腰巻石垣を新発見。

写真 10　本丸清海堀発掘調査（腰巻石垣）

（4）坂谷曲輪発掘調査（2020 年度）

・枡形門の外門・内門のそれぞれの門礎石を検出。
・現地説明会に代わり成果動画を作成・公開。

成果動画

石垣めぐりマップや発掘調査現地説明会資料については HP にも掲載しています。ぜひご覧ください。

石垣めぐりマップ

現地説明会資料

報告4

吉田城址の近年の発掘調査と整備

豊橋市教育委員会　中川　永

1　はじめに

明応5年（1496）頃、戦国時代の地方都市・今橋に築かれた今橋城は、後に名を「吉田城」と改められ、東三河地方を支配する政治の中心を担っていった。

牧野氏や戸田氏といった東三河の国衆や、駿河・遠江の戦国大名である今川氏が城主を務めた後、永禄7年（1564）からは松平（徳川）家康の東三河支配の拠点として、筆頭家老であった酒井忠次が城主を務めている。天正18年（1590）の徳川家の関東移封に伴い、豊臣秀吉重臣たちが関東への押さえとして東海道沿いの城に配置される中で、吉田城では後に姫路城を築くことになる池田照政（輝政）が城主となる。この際、現在に続く大規模な城郭へと改修され、また天守や石垣を伴う織豊系城郭へと転換を果たすことになる。

2　吉田城址の立地

吉田城址は、北方に豊川を望む河岸段丘の縁辺部に築かれている。このうち、本丸を中心とする僅かな範囲が、本来は小山の様に隆起していた位置にあたる。ここから周辺に向けて緩やかな下り傾斜となっており、かつて本丸からは南側の城下や東西に延びる東海道、さらには北側に展開する沖積低地を広く望むことができた。吉田城が現在の立地に築かれた背景には、こうした環境が深く関わっている。城址の南を通る東海道には吉田宿を中心とする宿場町が栄えていたが、その交通は常に城から監視される位置であり、制度上も東西2箇所の惣門によって管理されていた。また城を北流する豊川は当時、城の下流1.5㎞の地点で三河湾と繋がる河口部となっていた。ここには東三河地域の水運物資が一堂に集積され、吉田城下には湊町が発達した。

このように吉田城は、陸海路の掌握に優れた立地であり、翻って言えば、そのコントロールを重要な目的として築かれ、維持されてきた城郭であると言える。

3　城址調査の流れ

吉田城址では、昭和52度年の第1次調査以来、58次にわたる調査を実施している。このうち、第1～50次調査は開発対応に伴う調査である。城址の保存と活用を目的とした調査は、平成29年度に行った第51次調査以降、令和2年度の第57次調査まで断続的に6回実施している。また令和3年度に実施した第58次調査は、崩落した石垣の解体修復工事に伴う記録保存を目的としている。この様に、吉田城址で行われてきた調査の大半は開発行為に伴うものであり、文化財としての城址の本質的価値の把握や整備に向けた取り組みは、まだ始まって間もないと言える。

4　2つの高石垣の発掘調査

（1）織豊系城郭を象徴する石垣

ここでは、第51次及び、第57次調査で発掘された2つの高石垣について取り上げる。これらは吉田城址だけでなく、当時としては東海地方でも最大級の規模を誇り、織豊系城郭としての性格を明朗に示す遺構でもある。

（2）鉄櫓下石垣の調査（図1・2・5）

第51次調査で発掘を行ったこの石垣は、本

丸北西隅角を固める石垣であると同時に、江戸時代には事実上の天守として機能した鉄櫓の櫓台でもある。チャートを中心とした自然石による『野面積』技法で築かれており、城址を代表する安土桃山時代の遺構として知られている。発掘調査の結果、城内最大の高さ12.7 mを測ることが確認された。さらに特筆すべき点として、石垣下部に高さ1.2 mを測る石組基礎構造や、その前面を支える整地基礎が確認されている。特に整地基礎は、石組基礎の前面及び下部の地山層に、深さ0.9 ～ 1.0 m、幅2.8 ～ 3.6 m以上の掘り込みを行い、砂礫や粘土、川原石等を幾層にも堅く突き固めた全国的にも他に例を見ない構造である。こうした構造が採用された背景には、地山層が河川の沖積作用によって堆積した極めて軟弱な砂層であることが挙げられる。つまり、本来は石垣構築に極めて不向きな地盤上に高石垣を築くにあたり、いわば地盤改良工事として整地基礎が築かれている。これは翻って言えば、「この場所に高石垣を築く」という結論を大前提に、池田照政による改修が進められたことを意味している。もちろん、こうした特殊な技法を池田家が独自で有していたとは考え難く、恐らくは豊臣政権から先進的な技術を有した奉行等が派遣され、試行錯誤の末に完成した施設と考えられる。

（3）南多門堀底石垣の調査（図1・3・6）

南多門は本丸正面入口に築かれた施設であり、第57次調査はこの門からやや東側に位置する堀底部分で行われた。調査の結果、石垣は花崗岩を中心に築かれ、鉄櫓下石垣に匹敵する12.6 mの高さを有していたことが確認された。石垣構築技法については、花崗岩に矢穴を有するものが少量認められるものの、半裁した玉石を始め自然石を多用することから、『野面積』と『打込接』の過渡的技法が用いられている。このことから構築時期については、安土桃山時代と江戸時代初期の2時期の可能性が挙げられるが、その巨大な規模から、池田照政が在城した安土桃山時代の遺構である可能性が高いと捉えている。ただし、根石はわずかに安土桃山時代の瓦を含む堀内部の堆積層上に据えられていることから、当初は土造りの切岸状の構造であった斜面を、後に改修して石垣造りとしたことが分かる。

なお当石垣は、鉄櫓下石垣とは異なり、石垣地下に特殊な基礎構造を有していない。これは台地の安定した基盤層上に位置することから、地盤改良工事を行わなくとも高石垣の普請が可能であったことによると考えられる。

（4）石垣立地にみる『魅せる』意識

以上の様に、吉田城址では安土桃山時代としては東海地方屈指の高さを誇る2つの石垣が築かれている。これらは①チャートを主体とする鉄櫓下石垣と、②花崗岩を主体とする南多門堀底石垣という、異なる構造であることが分かる。また南多門堀底石垣が堀内部の堆積層上に築かれ、また構築技法上も打込接的様相を有することからは、鉄櫓下石垣が先行し、それに僅かに遅れて、南多門堀底石垣が築かれたことを示している。つまり、一期工事である鉄櫓下石垣に対し、南多門堀底石垣はやや遅れた二期工事として実施された普請であると考えられるのである。これら高石垣が築かれた理由、あるいは普請の優先順位は、どのような背景によるものであろうか。

ここで注目したいのが、吉田城が東海道・豊川という2つの交通路を重視してきた城という点である。今回取り扱った石垣のうち、鉄櫓下石垣は豊川の船運、そして下流の吉田橋を歩く人々から最も目につく位置にあたる。つまり民衆が最も良く目にする位置であり、こうした場所だからこそ、軟弱地盤に技巧を凝らす

ことで高石垣を築き、さらにはそれに付随する天守や櫓群が建設されたと言える。よって鉄櫓下石垣は、民衆に見せつけることを重要な目的とし、その荘厳な姿をもって豊臣政権の東三河支配を円滑に進めるための役割を担ったものと言えよう。

一方で南多門堀底石垣は、基本的に民衆が目にすることの無い、本丸の正面入り口にあたる。こうした立地は、いわば外（＝民衆）向けの施設であった鉄櫓下石垣に対し、内（＝家中や豊臣政権）向けを意識した施設であったと考えられる。池田照政は天正12年（1584年）の小牧・長久手の戦いで、父である恒興と兄である元助が討死し、急遽池田家当主となっている。しかしながら、就任当初や同戦いの終了時は、重臣の伊木忠次が池田家の事実上の差配者と認識されていた。忠次は池田家臣でありながら田原城主であり、また豊臣秀吉から知行安堵状を受ける立場であるなど、吉田城入城時の照政と家臣団との主従関係は、必ずしも安定的では無かった。こうした中、家中、あるいは城への来訪者に対し、城の中枢部である本丸正面を荘厳に飾る高石垣を築くことで、池田家の強大さを示す狙いがあったと考えられるのである。

以上の様に、２つの高石垣は単なる防衛施設としての機能を越え、統治システム上の象徴的役割を担った、織豊系城郭としての性格が顕著に表れた遺構と考えられるのである。

このような視点に立った時、石垣が築かれた前後関係についても理解がし易い。先行して築かれた鉄櫓下石垣で用いられたチャートは、城からわずか5㎞程度の弓張山系で産出する。一方の南多門堀底石垣で用いられた花崗岩は、額田郡など20㎞以上離れた場所で産出するものである。いずれも池田領内だが、それぞれの城までの距離、つまり運搬にかかる期間の差異が、そのまま普請の時期と石材種別に影響したと考えられるのである。翻って言えば、先行して確保できるチャート材を用いた鉄櫓下石垣普請の優先度は、城内に現存する他のあらゆる石垣よりも高いものであり、池田照政、あるいは豊臣政権が、いかに豊川・三河湾を介した水運を重要視していたのかを如実に表しているとも言えよう。

５　城址の整備に向けて

城址の保存と活用に向けた調査は現在6回を数え、ようやく城郭中心部の姿が明らかになりつつある。しかし解決すべき点も多く、最後にこれら課題について述べたい。

最も重大な課題は、現存遺構の保全である。吉田城址では令和元年度から3年連続で石垣が崩落するなど、遺構の損傷が蓄積している（図4）。これは廃城以来150年以上が経過し、石垣上で巨大化した樹木が石垣内外面に負荷を与えたことや、さらに大雨も大きく影響してくる。また、崩落した石垣は解体修復を行うことになるが、修復後の石垣はどれだけ旧来の姿に似せてもオリジナルではなく、「令和に積み直された新しい石垣」と言われ続けることになる。このため今後は経過観察を進めながら、樹木の伐採や間伐、また伐採後の切株の管理や雨水対策を講じ、予期し得る危険を軽減していくことが重要である。

また樹木管理は、遺構負荷を軽減するだけでなく、城の縄張りがもつ魅力を復活させるためにも有効である。現在の「お城ブーム」は、石垣や建物など単独の遺構に注目が集まることが多いが、城本来の機能はそれら遺構群が形成していた空間そのものによって成立している。樹木管理によって、現在では見えなくなっている城の導線や遺構同士の位置関係を明瞭にすることで、江戸時代、あるいは戦国時代以来の『本物の遺構・お城』の魅力を顕在化することができるだろう。

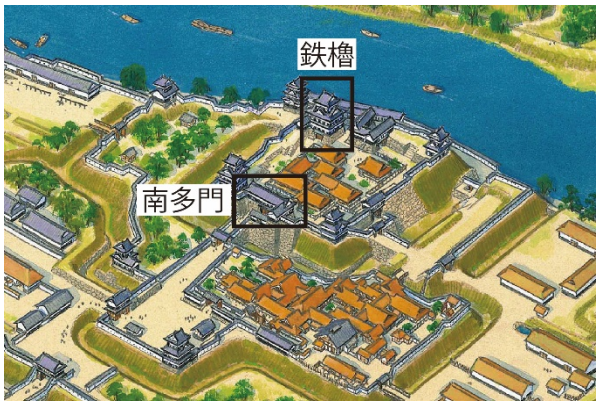


図１　施設位置図

図２　鉄櫓下石垣の基礎構造

図３　南多門堀底石垣の埋没部分

図４　令和３年５月に崩落した千貫櫓台石垣

図５　鉄櫓下石垣と発掘現場

図６　南多門堀底石垣と発掘現場

報告５

名古屋城における天守台石垣の築造工事について

名古屋城調査研究センター　西本　茉由

１　はじめに

名古屋市では平成 29 年度から令和２年度まで特別史跡名古屋城跡天守台石垣周辺で石垣の健全性を把握することを目的とした発掘調査を行ってきた。調査の結果、根石周辺の基礎工事の痕跡を確認することができた。今回は、本丸内堀内における最新の調査成果を踏まえ、名古屋城天守台石垣において石垣根石を据える際の地業がどのように行われたのかを報告する。

２　特別史跡名古屋城跡の概要

名古屋城は熱田台地の北西端の名古屋市中区本丸に位置する（図１・２）。熱田台地は名古屋台地とも呼ばれ、６～９万年前に火山降灰等を含む海底堆積物が隆起してできた洪積台地であり、名古屋城付近から熱田神宮付近までの南北６㎞程度、東西は広いところで３㎞程度の細長い地形となっている。名古屋城の北と西は段丘崖に面し、比高は 10 ｍ程で、北から西にかけては濃尾平野を形成する低地部が広がる。西側には台地の縁辺に沿って築城に伴い開削された堀川が流れる。

名古屋城は、徳川家康が清須に代わる尾張の中心地として城地を選定し、慶長 15 年から築城に着手した。石垣は北国・西国の大名 20 家を動員した公儀普請によって築かれた。慶長 17 年には大・小天守、慶長 20 年には本丸御殿が完成し、家康の九男義直が入城した。以後、明治維新まで尾張徳川家の居城となった。熱田台地の西北端に位置する平城で、中央に本丸を置き、二之丸、西之丸、御深井丸が本丸の四方を取り巻き、これらの南面から東面に武家地として利用されていた三之丸が配置されている。天守と本丸御殿を含む多くの建造物は昭和 20 年に戦災焼失した。現在は西北隅櫓など３つの櫓と３つの城門が現存している。改変された遺構も部分的には存在するが、本丸やその周囲を巡る曲輪付近の縄張は、概ね旧態をとどめている。

３　発掘調査の成果

４か年に及ぶ調査で、大天守台周辺に 23 箇所、小天守台周辺に３箇所、計 26 箇所に調査区を設けて発掘調査を行った（図３）。石垣の安定性を保全するため、基本的に根石までは露出させず、根石を据え付ける地業工事である地形根切の痕跡が確認できた時点で掘削を止めている。発掘調査のほかに天守台周辺で 10 箇所ボーリング調査を行っており、地盤の状況を確認している。また、地中レーダー探査を本丸内堀の堀底で実施しており、令和２年度にはレーダー探査で強い反応があった地点について発掘調査を行い、後述する石列のような遺構を確認した。

発掘調査では現天守閣再建時の廃棄物による攪乱坑や焼土や被熱瓦を含む戦災層、明治 24 年の濃尾震災による被災時の廃棄物を均した層などが確認された。出土遺物の多くは近代から現代の土層で検出している。

基本層序

上層から、表土層、戦災ガラを多く含む現代の堆積層、戦前の堀底である旧表土層、明治 24 年の濃尾地震時に被災したと考えられる壁材等を含む近代層、大きめの瓦片や礫を含む近世堆積層、築城期と考えられる盛土、石

垣の基盤層（図4）となる。旧表土層の検出標高は堀中央部で低く、石垣付近ではやや高くなる。また近世堆積層は内堀西側において特に分厚く堆積する。基盤層は堀底では地山層と思われる熱田層由来の砂質土であるが、本丸面では黒褐色シルトを主とする中世以前の包含層を石垣築造時の基盤面としている。

地形根切について

本丸内堀内でＩ・Ｋ・Ｍ・Ｒ・Ｓ・Ｖ区の６箇所（うち橋台を含む大天守台周辺では３箇所）、本丸面で小天守南面Ｐ区の1箇所において根石と考えられる石垣最下段の築石を確認し、最下段の築石の前面において地形根切と考えられる痕跡を検出した。Ｔ区においても石垣最下段の築石が確認されているが、地形根切と考えられる掘り込みは確認されなかった。

いずれも基盤層の上にシルトブロック混じりの盛土をし、盛土ごと基盤層を掘り込んで根石を据えている状況が観察できた（図5）。根石の前面には捨石を施工している状況もほとんどの調査区で確認できた（図6）。

名古屋城の大天守台石垣は宝暦２年（1752）～５年（1755）にかけて修理が行われており、その際の工事において根石の下に胴木が設置されているということが記録されている。しかし今回の調査では石垣の保全に留意し、地形根切の状況が確認できた時点で掘削を止めているため、胴木の存在は確認できなかった。なお名古屋城において、胴木は御深井丸北側石垣、二之丸旧東二之門跡北側石垣、本丸搦手馬出東面石垣で確認されている。

その他調査成果と今後の展望

その他の成果として、令和２年度調査において先述した通り地中レーダー探査成果を基に発掘調査区を設定し調査を行ったところ、本丸内堀堀底より東西方向に未確認の石列を２列確認した（図7）。石列は築城期の盛土または地山を掘り込んで据えられている可能性が高い。石列を構成する石材はほぼ花崗閃緑岩の割石であり、石垣の下端付近と思われる。大天守西側の縄張については計画の変遷があったとされてきた（図8）。今回の調査で縄張計画変遷の新たな検討材料が発見できた。

名古屋城調査研究センターが発足して３年になる。個々の調査は進んできているが、調査成果をまとめて天守台石垣等の築造や修理の歴史を名古屋城全体の歴史の中で位置付けることはできているとは言えない。

今後は天守台周辺で行われた発掘調査で確認された遺構、遺物を検討し、改修の履歴や時期等を把握していきたい。

［**参考文献**］

小寺武久、1999、「名古屋城の建築（作事）」『新修名古屋市史　第３巻』、名古屋市
千田嘉博、2012、『天下人の城　信長から秀吉・家康へ』、風媒社

図１　特別史跡名古屋城跡位置図

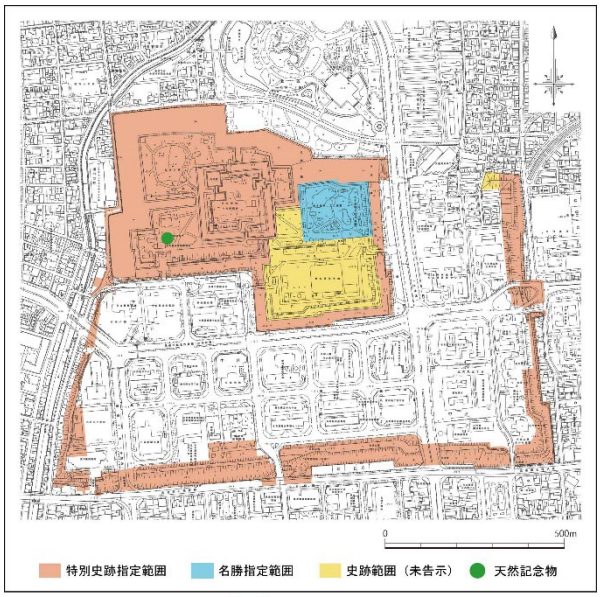


図２　史跡指定範囲図

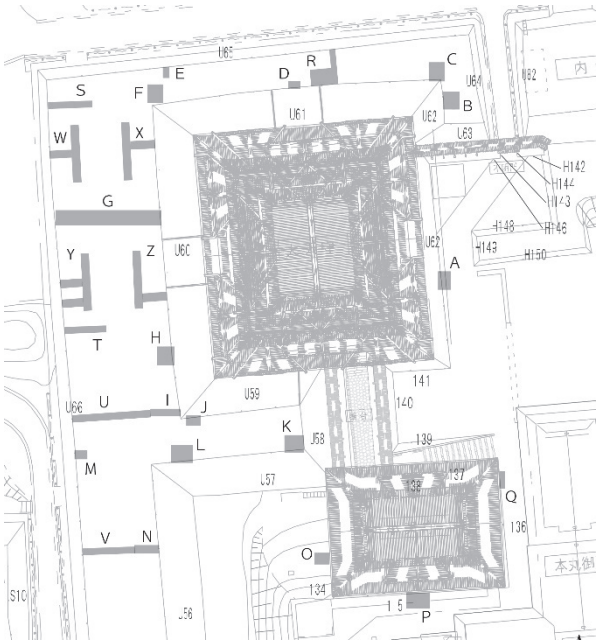


図３　調査区位置図

図４　基本層序（U区北壁中央付近　南から）
上層より表土、戦災層、旧表土、近代層、
近世層

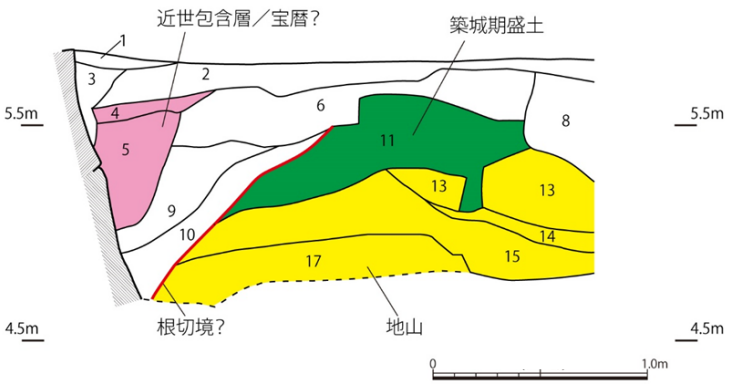


図５　R区　地形根切状況

図６　P区　根石前面の状況（南から）
赤丸内に拳大の捨石あり

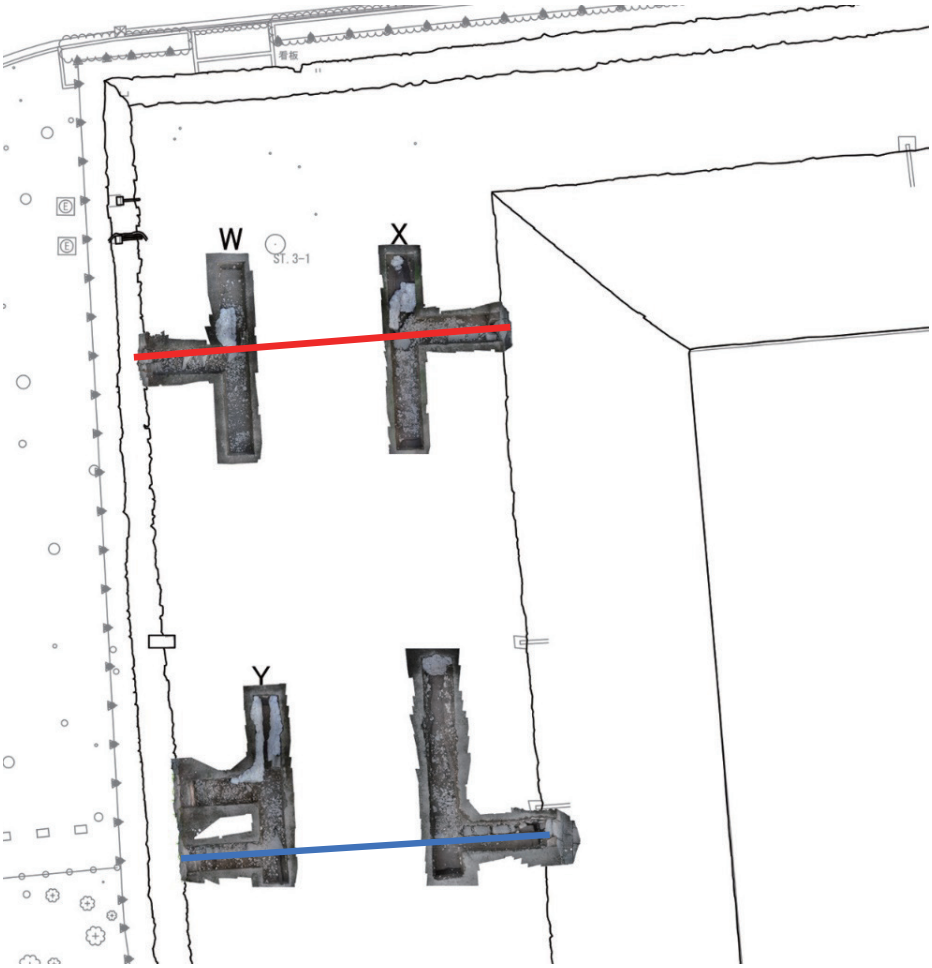
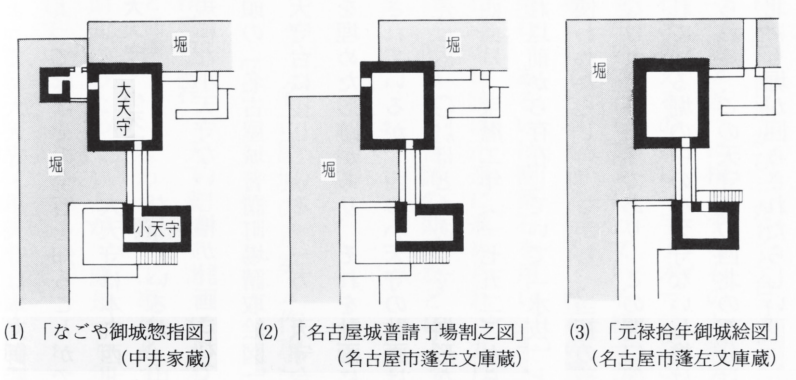


図７　本丸内堀内石列検出状況（赤線・青線で面がそろう）



(1)「なごや御城惣指図」（中井家蔵）　(2)「名古屋城普請丁場割之図」（名古屋市蓬左文庫蔵）　(3)「元禄拾年御城絵図」（名古屋市蓬左文庫蔵）

図８　天守縄張の変遷図（『新修　名古屋市史』第3巻より）